
キャリーケースの女

瀬戸真朝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャリーケースの女

【Nコード】

N85990

【作者名】

瀬戸真朝

【あらすじ】

東京の大学に入学し、夢の一人暮らしを始めたシュンの元に初対面の瑞穂が突然現れ、シュンは半ば無理矢理に瑞穂と同居する羽目に。更にバイト先の先輩や同期の大越、愛するみなこちゃんを交えたコンビニラブコメディ……と思いきや、後半で瑞穂の知られざる過去が明らかになり あなたには、帰れる家がありますか？

完結済。反響によつては番外編掲載も。

某大学文芸部部誌掲載作より大幅加筆修正済み。第17回電撃大賞落選作。

電撃大賞にほぼ全編を改稿して投稿しようと思っていますので、そのことを踏まえて感想を頂けると大変嬉しく思います。ちなみに狙いはメディアワークス文庫賞一本です。

1 - 1 (前書き)

とてもハイテンションなコンビニラブコメディーです。

ですが第七章 瑞穂の物語 から急展開を迎えます。

それまではゆるーい彼らの物語を楽しんで頂けたら幸いです。

全10章で既に完結済みです。

なお、手元にあるwordファイル内ではもちろん文頭を下げているのですが、編集上の都合により文頭下げをしております。申し訳ないのですがご了承の上お読みください。

第一章

「よっしゃ、ついに一人暮らしの始まりだー!!」

実家から送った荷物を昼過ぎから運び入れていたが、やっと片付けも一段落着いた。

布団を敷いて勢いよく倒れ込むと、天井の木目が視界に広がる。

「ここボロいし、こんな音立てると苦情来たりするのかな……ま、一階だし大丈夫だよな。よしっ、今日からここは俺の城だ!」

梅雨明けも近付き、夏も迫った今。

春から始まった東京での大学生活も多少は落ち着いてきた。

今までは毎日一時間半もかけて実家から大学に通っていたが、バイトの給料も貯まって今日から念願の一人暮らしが出来ると思うと、どうしても気分が高まってしまう。

「もう、わざわざ毎日家に帰ったりしなくていいんだ!」

布団の上で派手に寝返りを打つと、今までの日々を思い返した。

「飲み会やバイトで朝までこっちいたりすると、荷物やテキストとを取りにわざわざ家帰ったりして面倒だったしな。仕送りとバイト代足しても、こんなボロアパートを借りるので精一杯だったけど…

…」

二階建て木造アパート一階。

部屋の壁は土壁で出来ていて、床はフローリングではなく畳の和室。私鉄だが特急が止まる比較的大きい駅が近いのと、風呂・トイレ別というのが数少ない利点、というこの部屋を見回してみる。

「まあでも、友達んちに何度も泊まるのは気が引けたし、やっぱり一人暮らしは楽しみな。それに、せっかく東京の大学に来たんだから、距離なんて気にせずにキャンパスライフを満喫しなきゃな！」

おっと、いけない。

一人暮らしをすると独り言が増えるをよく言うが、その通りなのだと気付いた。

これから気を付けないと。

そんな時、玄関のチャイムの音が聞こえた。

一体誰だろう？

片付けに手間取って、今はもう夜の十一時だ。これ以上荷物が届く予定はないはず。

それに、ここの住所は友達にまだ教えていない。

「はい、どちら様ですかー？」

一体誰なのか疑問に思いながらも立ち上がると玄関に行き、ドアを開けた。

すると扉の前にいたのは化粧気もない、美人でもなくパツとしない顔の若い女だった。

髪は茶髪のショートカットで、ボサボサな頭をしている。

服はヨレヨレのＴシャツに、濃い青のジーパン姿。

俺もこの時期だと、Ｔシャツの上からチェックの柄シャツを羽織り、水色のジーンズとかと合わせているくらいだ。

それで髪も染めてない俺は、おしゃれだと言われる人種とは程遠いのは自覚していた。

しかしそんな俺にも、この女の格好がダサいことは分かる。

そして女の背後には革製で小さめの黒いキャリーケースがあり、縫い目の白が黒の革に映えて目立っていた。

どこをどう見回しても全く見覚えがないぞ……。

「あー、どちら様ですか？」

戸惑いながらも話し掛けると、女は何も言わずにキャリーケースを持ち上げて部屋に突上がり込んで来た。

「ちょ、ちょっと！ 勝手に入らないで下さいよ！」

だが女は何食わぬ顔で中に入り、部屋中をゆっくりと見回した。

「……ふーん、男の部屋にしてはきれいな方ね。ワンルームだけど……ま、そこは問題ないか。もうちょっと広ければ良かったんだけどねえ」

「な、何なんですか、あなたは？！」

勝手に部屋に上がり込まれたらそう聞くのも当たり前だ。

しかし、女はその質問には答えずにキャリーケースを部屋の隅に置き、俺の方を見た。

「あたし、ここに住むから。よろしく」

突然言われたその一言は、俺の頭を混乱させるのに十分過ぎる言葉

だった。

ここに住む？ 誰が？ 一体どうして？

しかしいくら考えても仕方ないことに気付き、慌てて反論した。

「おいっ、勝手なこと言うなよ！ なんで俺が、知らねえ女と暮ら

さなきゃいけないんだよ」

はせがわ みずほ
「長谷川瑞穂」

「……………はあ？」

この状況で名乗られるという不意打ちをされ、つい気が抜けてしまった。

「これであたしたちは知り合いでしょ。何か文句ある？」

そう言われて納得しそうになったが、慌てて突っ込んだ。

「名前知ったからって知り合いじゃねえよ！ そもそも俺の名前を知らないじゃんか」

あやつく騙されそうだった俺も俺だが、肝心なことにようやく気付いた。

だが、まるで小さな子供を見るような目で女は見てくる。

「知ってるわよ、なかい しゅんや中井俊也君。

呼びやすいから『シユン』でいいわよね」

いつの間にか名前が知られている上、更にあだ名まで勝手に決められている状況に益々焦った。

何だかこのままだと、せつかく手に入れた俺の城が見ず知らずのこの女に乗っ取られてしまうような気までしてきたぞ。

「何がシュンだよ！ それに何で俺が、お前なんかと暮らさなきゃいけない」

文句を言おうとすると、女が言葉を遮ってきた。

「『お前』じゃないわよ、『瑞穂さん』って呼びなさい。あたし、これでもシュンの一つ上なんだから」

「何で俺の歳まで知ってるんだよ？ というか、俺の一体何をどこまで知ってるんだ？！」

そうやって焦っていると、なだめるかのような口調で女はこう言った。

「まあ良いじゃない、シュン。家賃と食費と光熱費は半分払うし。敷金や礼金とかは払わないけどね」

『半分』 その言葉につい、心をときめかされた。

築ウン十年のボロアパートなのに、ここは一応都内だからって家賃は高めで今のバイトの給料だと正直辛い。

仕送りもあるが、電気代とかを考えたらなかなか切羽詰まっている。でも、だからって今日初めて知り合った奴と一緒に暮らすなんて…

…それに、一応相手は女の子なんだし……でも家賃………。

頭の中で葛藤していると、突然女が俺の顔を間近から覗き込んできた。

「……うわぁ、何ですかいきなり？！」

慌てて離れると、女は笑い始めた。

「いやあ、一緒に暮らすって言っただけでこんなにビビってるなんて、童貞なんだなあと思って」

「ちよっ、おい！」

どうしてバレた？！

大学に入って、周りの男共がとくに卒業していると知り、正直ただでさえ焦ってるのに……

「ははは、まあそう焦らなくていいよ。チェリーボーイ君」

まるで、俺の心を読んだかのようなその言葉は胸に突き刺さった。

「べ、別に、今年でもう十九なんだからいつだって出来るし！ それにそんなこと、お前に関係ないだろう」

慌てながらもそう言うと、「『お前』じゃなくて、みーずーほーさん！」と釘を刺してきた。

そんな、初対面で名前なんか呼べるかよ……。

「これから暮らしていく相手なんだから、ちゃんと名前で呼べるようにしなさいよ、シユン。それに、あたしがシユンの童貞を卒業させたっていいし」

「はあ?!」

同居することがいつの間にか決められている上、突然そんなことを言われて更に慌てた。

だがそんな俺を全く気にしていない様子で、さっき敷いた布団をまるで自分の物かのように女はめくる。

「じゃ、あたし長旅で疲れちゃったからもう寝る。おやすみー」

「ちよつと、それ俺の布団なんですけど！」

慌てながら布団の横に座ると、女はそんな俺を見て笑った。

「いいじゃない、横で寝れば。ついでにやっても良いよ。あたしは寝てるけど」

そして女は欠伸をすると、目を閉じてしまった。

「ちよつ、起きて下さいってば！」

掛け布団ごと揺すったが起きる気配は少しもなく、女は寝息を立てていた。

「……………こんなのアリかよ……………」

もはや諦めるしかないと悟った俺は、仕方なくさっき押入れにしまったはずの予備の布団を運び出し、女とは離れた場所に敷いた。……………と言っても、狭いワンルームだから全然離れてなんかいないんだだけ。

「『友達が出来た時の為に、もう一式持って行きなさい』って布団持たせてくれた母さん、ありがとう……まさかこんな風に役立つとはな……くっそー、明日こそ追い出してやる!」

朝から畑仕事で今頃とつくに寝ているはずの母さんに向かってそう言つと、とにかく目を閉じて寝ようとした。

だが、隣で寝ている存在が気になって、もう一人の俺が言うことを聞いてくれない。

結局、殆ど寝られずにその夜を過ごした俺だった……。

翌日。起きてすぐに違和感に気付いて背中を触ると、着ていたＴシャツが少し濡れていた。

どうやら寝汗をかいてしまったらしい。実家でこんなことはなかったが、この部屋にはクーラーがないから仕方ないのだろう。

ああ、これから暑い夏がやってくるのか。嫌だな……。

寝起き頭でそんなことを考えていると、先に起きていたらしい女が隣の布団から不思議そうな顔で俺を見ていた。

「そんなじつと見てきて、一体何なんですか?」

「いや、何で襲って来なかったのかなあと。てっきり、我慢出来なくて夜中にでも来ると思ってたし」

思ってもいないことを言われ、俺は頭を抱えるしかなかった。

「……そんなに俺、信用出来ません? さすがに、好きでもない女の人なんて襲いせんって」

「チェリーボーイなの?」

布団の上を転がりながら笑っている女を見て、俺は髪の毛をかき上げるしかなかった。

好きな人相手じゃなきゃ何も意味がない、と正直思う。焦っているのも事実だったが、経験がないからこそそう考えてしまふ俺は異常なのだろうか。いや、そうではないと信じたい。だから少し躊躇はしたけれど、語気を強めて言った。

「……俺、絶対そういうことしませんから！」

女は動きを止めて起き上がると布団の上に座り、立っていた俺をただ黙って見つめている。

その表情から驚いているように見えたが、何がおかしいのか突如笑い始めた。

「あはははは！　じゃあシュンがいつまでチェリーボーイでいられるか、楽しみにしとくわ」

そう言って口角を上げた女の笑みが、何故だか印象的に思えた。

その後、俺が作った朝食を囲みながら出て行くように遠回しに言ってみたものの、全然効かなかった。

それに害はなさそうだし家賃も助かるからと、結局のところ滞在を許してしまっている。

だからって長期でもいいかは別だけど。

……なんかもう、この状況を受け入れるしかないと思えた俺は、昨日と比べてちょっと成長したのかもしれない。

はあ……結局、一人暮らしを一日も体験出来なかったんだなあ……俺。

第二章

夜になって、あの女……瑞穂さん（と、呼ばないとまた怒り出す）をアパートに置き、いつものように下り電車で揺られていた。ガラスを挟んだ窓の外には、既に見慣れた観覧車が見える。大学から少し先の高台にある玉那たまなランドという小さな遊園地のもので、電飾の模様を何通りも変えながらこちらに近付いてきた。

やがて、大学の最寄駅に着くアナウンスが鳴る。

『中成大学・明王大学駅ちゅうせいだいがく・めいおうだいがく』の駅周辺は山に囲まれ、遊園地の他にも玉那丘陵の自然を残して作られた大きな動物園もある地域だった。初めてうちの大学を見た時、『こんなところが東京だなんて詐欺だろ！』と心の中で叫んだのをよく覚えている。

大きなお店があった方が便利だと母さんに言われ、同じ市内だったが大学から少し離れた玉那駅近くにアパートを借りたのもそのせいだった。

明王大側である西口を出るとすぐ見えるのは、濃い緑色の看板が目印のコンビニ、『BUN BUN ブンブン 中成大学・明王大学駅前店』だった。

大学近くのここがバイト先で、俺は夜勤をしている。

「おはようございます！」

バイト開始十五分前に？バックルーム？と呼ばれる従業員が集まる部屋に入って挨拶をすると、一歳年上の佐藤生人さとういくと先輩が先にいた。

「ああ。おはよう」

佐藤先輩は全国でもレベルが高くて名が知られている中成大に通っていて、週に一回は二人で組んでいた。

寡黙だが、仕事はいつも完璧にこなす先輩だ。

……一方で俺なんて、周りから記念受験と揶揄された中成大に案の定落ち、滑り止めだった明王大なんかに通っているし、春から始めたこのバイトでも失敗ばかりだ。

だから、いつも冷静で頼りに出来る佐藤先輩に憧れていた。

先にユニフォームに着替えると言って先輩が更衣室代わりのロッカールームに入ると、奥からピンクのスカートをなびかせて向かってくる女の子が見えた。

サイドに結ばれたツインテールと形も程良い胸を揺らしながら、俺の前で止まる。

「俊也くん、おはよ。朝まで大変だけど、今日も頑張つてね」

「もちろんだよ、みなこちゃん！ 今日頑張るよ！」

ただでさえかわいいのに、まるで本当の天使かと思えるような笑顔。そして男では決して出ない甘く可愛い声で『頑張つてね』なんて言われたら、たとえ夜勤がどんなにきついても男だったら笑って返すしかない。

彼女は都内でも有名な名門女子大に通う田代美奈子^{たしろ みなこ}ちゃん、うちのコンビニのオーナー夫婦にとってたった一人の愛娘だ。

実は一つ上だけとそれを感じさせない程の可憐さで、今日も彼女から目が離せなかった。

「おにぎり作ってきたから食べてね」

テーブルの上のお皿には海苔が付いたおむすびが並んでいた。たまにこうやって料理を作ってきてくれるくらい、みなこちゃんは優しい女の子だった。

「いつもありがとう。みなこちゃんのおにぎり、おいしくって大好きだよ」

「おい、中井。始めるぞ。さっさと着替えろ」

いつの間にか着替え終わっていたらしく、佐藤先輩は緑のユニフォーム姿で立っていた。

「うわぁ先輩すみません、すぐ着替えます！ ごめんね、みなこちゃん」

本当はみなこちゃんともっと話していたかったが、さすがに佐藤先輩には逆らえない。

「頑張つてねえ。後でおにぎり食べてね」

笑顔でそう言われ、つい一瞬顔がにやけてしまったのは秘密だ。

こんなにかわいくて優しいいい子はなかない、と断言出来る。学部の大半が男で出会いがない俺にとって、みなこちゃん存在は心のオアシスだった。

たとえ、こんな俺には高嶺の花だと笑われても！

「ああ、みなこちゃん」

みなこちゃんの笑顔を思い出し、ロッカールームで着替えながらそう呟いた俺だった。

そんなみなちゃんと比べて……瑞穂さんは何でこんなにひどいのだろう！

うちに押しかけて来て既に一ヶ月が過ぎたが……正直、瑞穂さんの性別を疑う出来事があり過ぎる。

最初、（『家賃の半分は払うからルームメイトよ』と怒るが）居候なのだから料理ぐらいは作ってもらおうと思ったが、出てきた物は黒ずくめの料理たちで言葉を失った。

せめてラーメンぐらいは作れるかと思ったら、お湯が沸騰する前に麵を入れるという暴挙で、伸びまくっているラーメンを食べる羽目になった。

お腹を壊したくないし何よりもおいしく食べたいので、結局のところ俺が全て作っている。

それに片付けもすぐしなくて物を散らかすし、食べかすもよく落とすから掃除も大変だ。

更に瑞穂さんは無類の酒好きで、部屋には日本酒の瓶が日に日に増えていった。

「シューン！ あんたも飲みなさいよ」

未成年だって言っているのに関わらず、たまに俺にまで飲ませてくる。

どうやら俺は強いらしく倒れこむほどは酔わない一方、瑞穂さんは酔い出すと所構わずごろごろ寝るから大変だったりする。

全然言うこと聞いてくれないし……。

「瑞穂さん、布団で寝て下さい！」
「やだぁーここで寝るもんー」

部屋のと真ん中で転がる瑞穂さんの腕を引っ張り、布団の上まで運ぶことも多々あるからやれやれだ。

それに一ヶ月が経って生活費を半分に割った額を請求したら、
「確かに『家賃と食費と光熱費は半分払う』とは言ったけれど、光熱費に水道代は入らないわ。悔しかったら辞書を引いてみる事ね」
なんて言われ……それを知った時のショックと言ったら！！
辞書の前で倒れ込んだ俺がいる……。

「いくら水使ってもタダっていいわね」と言っ、瑞穂さんは今もお風呂に浸かっていた。
く、悔しい……！

しかもこの前、家を出るタイミングが重なって一緒に最寄りの玉那駅まで歩くと、そのまま同じ電車で瑞穂さんも乗ってきた。

「そっいえば、瑞穂さんはどこの駅で降りるんですか？」
「え、ここだけど？」

丁度ドアが開いて瑞穂さんは歩き始めたが、駅名を確認して慌てて俺も降りた。

そこはあの、中成大学・明王大学駅で、瑞穂さんは東口　中成大学の方に向かうから驚いた。
だって、あの瑞穂さんが佐藤先輩と同じ中成大なんて！
悔しい……悔しすぎる。

そんな瑞穂さんもどこの本屋でバイトをしていて、アパートを空けることもたまにあった。

ただどお互い暇になると、紙を切って作ったオセロをして勝敗を競った。

俺ばかり勝っているとな瑞穂さんが悔しがって酒を飲み始めるから、結果的に困るのは俺なんだけど……。

瑞穂さんはいっだって本気で、いっだって向きになる。とても子供っぽい人だった。

それ以外にも、ひたすらトランプで（東京出身らしい瑞穂さんは？大貧民？が標準語だと譲らないが）大富豪をしたり、天気が良かったりすると外に散歩しに行ったりした。

どれも一人ではなかなかしにくいことで、そういう時に瑞穂さんが横にいと楽しいのも確かだった。

それに実家では姉貴と一緒に家事を手伝うのが当たり前だったし、結局のところ瑞穂さんの存在はそれほど重荷でもなかった。

生活費（水道代を除く）も半分だし！

そして夏休みも近付きテストも刻一刻と迫っていたが、夜勤の人数が少ないのもあってバイトは休めなかった。

中成大学・明王大学駅に着いて電車から降りた途端、熱風が顔に当たる。大学や俺のアパートがある玉那市は盆地で、寒さはもちろんで暑さも半端なかった。

実家は一応関東圏だが、こんなに蒸し暑いなんてことは殆どなく、早速夏バテ気味だ。

だがそんな日でも店内は涼しいのが、コンビニバイトの数少ない利点の一つだった。

今日は明王大で学部も一緒の大越健太おおこし けんたと組む日で、大越との日はいつもギリギリにコンビニブンブンに着いた。

「よっ、大越。今日も暑いなあ〜」

「おはようございます、中井くん。今日も遅いですね」

「ははは、なんでだろうな〜」

惚けたふりをすると、分かっているのか半分呆れているようだった。

「はいはい、ちゃんと仕事はして下さいね」

適当に返事をして、ユニフォームに着替えようとロッカールームに入った。

それにしても、同い年なのに大越は何故か妙に敬語を使ってくるから変な奴だ。

そして二十二時を過ぎて夕勤の子と代わり、大越と店内に出た。

この時間だと大抵人影は殆どなかったが、ふとアイスクリームケースの前でここにいるはずのない後ろ姿を見付けてしまった。

ショートカットでボサボサの頭に、何よりさつき見た覚えがある赤いＴシャツに濃い青のジーンズ姿。

「……みーずーほーさん！」

予想通り、表に『家がない』と書かれているＴシャツを着た瑞穂さんが振り返った。

半分冗談とも言えない文章がプリントされたその赤いＴシャツについては、既に夕飯の際に突っ込んだのでここではもう触れないでおく。

「ん？ どうしたの？」

「どうしたのじゃありません！　なんでそんな格好でうちの店にいるんですか！」

「ここ、あたしの大学からも最寄りのコンビニだし、客なんだからどこにいたって問題ないでしょー」

店で会うのは初めてだったが、瑞穂さんは悪びれない様子だった。……しかしよくよく考えてみると、このＴシャツを着て玉那駅から電車に乗ってここまで来た瑞穂さんって……呆れて何も言えないとはこのことだろうか。

「まあそうなんですが……少なくとも、その格好で一緒に電車は乗りたくないですね……あれ、でもなんでこんな時間に？　さっきまでうちで珍しくテスト勉強やってたじゃないですか」

「こんな暑い日にそんなのやってられる訳ないじゃない。あ、それよりアイス買ってよーあたしモンスターカップのバナナが好きー」

アイスケースを勝手に開けると、全国共通の緑のユニフォームを着た俺の方に青いパッケージで包まれたアイスを差し出してきた。

「俺は夾の方が好きですし、客って言うなら自分で買って下さいよ！」

アイスを受け取らずにそんなやり取りをしていると、大越が何やら不思議そうな顔をして近付いてきた。

先にレジにいた大越は、俺と同じ緑のユニフォーム姿だった。

「どうしたんですか、中井くん」

大越がそう話しかけると、瑞穂さんは大越の方を向いた。丁度今日の夕飯の際、同じ学部の友達がバイト先にいることが話題に上がっていた。

「あ、初めましてーシユンの飼い主兼ルームメイトの長谷川瑞穂って言います」

「飼い主ってなんですか！ 面倒を見ているのは俺の方でしょう！」

誰もいない店内だから良かったが、こんな漫才みたいなやり取りを大越も面白そうに見ていた。

大学でも仲が良い大越には、非常識で面倒見るのも大変な居候のことを一応話してあった。

「ははっ、あなたが瑞穂さんですか。お話は中井くんの方から聞いています。それにしても、面白いＴシャツですね」

「うん、だからアイス奢ってー」

文脈を相当無視したやり取りだったが、大越は意表を突かれたよう

に再び笑った。

そして「いいですよ」と言っレレジにアイスを持って行き、ポケットから財布を取り出していた。

瑞穂さんも「わーい！」と言いながらそれに付いていき、今やレジを隔てて二人は向き合っている。

一瞬呆気を取られたが、慌てて俺もレジに向かった。

それ以来、大越と組む日に瑞穂さんが急に来たり、俺のアパートに大越が時々遊びに来るようになった。

バイト前に三人でゲームとかで遊んだり、鍋を囲んだりした。

「なんで鍋なんだよ！！ もう八月も近いのに！」

大越がどこからか買ってきた、季節外れで高いくせにおいしくない白菜を俺は箸で突いていた。

「だって大勢で鍋って楽しいじゃないー」

「そうですよ、面白くていいじゃないですか」

瑞穂さんと大越は笑っている。

だが、ただでさえクーラーもなくて暑い中、鍋をやると言う瑞穂さんが信じられなかった。

瑞穂さんはそんな突拍子もないことを言うのが得意だったが、どうやら大越はそれがいいらしい。

勝手なことばかり言う瑞穂さんを大越は楽しんでた。

「ねえ、あたしとシユンと大越くんでバンド組もうよ」

その日も、瑞穂さんは取り皿に豆腐を取りながら急にそんなことを言い出した。

豆腐からは湯気が立ち上っている。冬ならともかく、夏の今は見ているだけで暑苦しい。

その思いを我慢しつつ、俺は驚きながら聞き返した。

「えっ、瑞穂さん、楽器出来るんですか？」

「馬鹿ね、シュン。出来ないに決まってるじゃない」

案の定そう答えたが、瑞穂さんは気にせずに続けた。

「でね、バンド名は？世界のChickenから？にするの！」

「あははは、いいですねそれ！」

大越は笑っているが、どうやらその様子から賛同はしているらしい。

「でしょー？ シュンと違って、やっぱ大越くんは話が分かる子ね」

「思い付きをただそのまま言ってるだけでしょー！」

もはや呆れている俺と対称的に、瑞穂さんに対し感心している大越がただのアホにしか思えないのは気のせいだろうか。

だがそんな架空妄想バンド話は盛り上がり、ピアノが得意なみなこちゃんをキーボードに加えるとなると、まさかの俺までテンションが上がってしまった。

「みなこちゃんがいるなら何だってやるぜーギターも何も弾けないけど」

「中井くんはほんと、みなこちゃんのが好きですね」

「だってみなこちゃん、かわいすぎるだろー！」

瑞穂さんも最初の頃は「『みなこちゃん』って誰？」と言っていた。だが、俺と大越で盛り上がっていると段々とどんな女の子なのか分かってきたようだった。

そうやってアホな話ばかりして、三人での日々は過ぎていった。

第三章

「シューンー！ いい加減起きてー」

テストも補講期間も終わり夏休みを満喫し始めてきた頃、朝から突然瑞穂さんに叩き起こされた。

「なんですか……まだ九時過ぎじゃないですか……」

「いーの！ それより、早く海行こー」

「あー、海………はあ？ 海！？」

言われた言葉の意味を段々と理解し、俺は飛び起きた。

瑞穂さんは何やらビニールバックを既に抱えている。

中にはタオルの他に、この時のために買ったのかレジャーシートや浮き輪などが透けて見えていた。

カーテンが開いた窓からは青々とした山並の他に、雲一つない青空に太陽が朝から本気を出して輝いているのが見える。

そういえば一昨日はバイトがなく、夕飯後に何気なくテレビを二人で見ていた。

「明後日は全国的にこの夏一番の快晴」という天気予報を見て、「海行きたい」と瑞穂さんが言っていたのを段々と思い出してくる。

いつもは付き合ってくれる大越が今日はバイトで、行けるのは俺だけだった。

それで、行ってもいいと俺も言った気はするが、決定事項ではなかったはずだ。

「もう準備出来たよー早く行こー」

昨日はバイトでもちろん夜勤明けだったが、ここまで準備をされたら、もう行かないとはさすがに言えなかった。

「……はいはい、行きますからちよつと待って下さいよ」
「やったー！」

叫んでいる瑞穂さんをよそに慌てて布団を片付ける。高校の授業で使っていた海パンはどこにしまったっけ、などと考えつつ突如海へと出発することにした。

電車を何本か乗り換えて途中で県境を越えたりしたが、瑞穂さんが行き方を知っていて迷うことはなかった。

家を出て一時間半後に辿り着いた海岸は思っていた以上の人出だったが、海というものは意外に近かった。

……いや単なる？海？とやらだったら、一応東京にもある。

だが、「あの汚い東京湾で泳ぐのはさすがに無理」と瑞穂さんが言うので、わざわざ都外にまで来たのだった。

……ん？ 泳ぐ？

海岸に着くとレジャーシートを敷いてビニールバックを置き、珍しくワンピース姿である瑞穂さんは早速ボタンを外し始めた。

「瑞穂さん、あの」

声をかけると、瑞穂さんは「ん、何？」と言ったまま手を止めなかった。

「あのですね、その……」
「何よ、早く言いなさい」

瑞穂さんははつきりしない俺を睨み付けてきた。もう言うしかない。

「……………俺、泳げません」

一瞬の間。あまりにこういう機会がなく、自分でもすっかり忘れていたことだった。そんな俺に対し、瑞穂さんは動かしていた手を止め、深刻そうな顔つきをした。

「ごめん、聞かなかったんだけど……………もしかして」

「……………はい」

夏真つ盛りである以上、海岸はカップルや家族連れの声で騒がしい。そんな中、瑞穂さんと俺がただ黙って見つめ合っている姿は周囲から明らかに浮いていた。だが。

「ごめーん、シュン、一応男の子だからまさかと思ってつい！ 今日、アレだったんなら言ってくれて良かったじゃない」

あまりに見当違いなその言葉に、さすがの俺も何のことか察するまでしばらくフリーズした。

「……………違います、かなづちなんです！ 第一、なんでそれなんですか！」

やっと現実に戻ってきてそう反論すると、さっきの深刻そうな顔が嘘かのように瑞穂さんは派手に笑った。

そして再びボタンを外す手を動かし、やがて露出している部分は少なかったが赤色のビキニ姿になった。

「あはははは、だったら浮き輪にしがみついたらいいじゃない。ほら、もう置いていくよー」

瑞穂さんは浮き輪を持って走り出して行く。俺はまだ服のままだ。

「瑞穂さーん、待ってくださいってばー！」

浮き輪の有無は今の俺にとって死活問題だ。

Tシャツを急いで脱ぎ半ズボンも下ろして海パン一枚になると、慌てて瑞穂さんを追った。

「あー、やっぱり夏と言ったら海よねー」

「はいそーですね……あー怖えー」

波打ち際より少し離れたところにいたが、浮き輪の中にいる瑞穂さんは海を満喫しているようだった。

一方、もちろん瑞穂さんが浮き輪を譲ってくれる訳がなく腕だけ輪の中に入れて、より沖の方へ引っ張る役目を俺は負わされている。深い緑色をした水の中にと、足元どころか水に浸かっている部分の殆どが見えなかった。

それがまた恐怖を倍増させる。

「まだ足着いてるんだから大丈夫でしょー」

「それでも怖いんですってばー！」

瑞穂さんは気楽そうだが小さい頃から泳げない俺にとって、考えてみると海なんて最後いつ来たか分からないくらいだ。

「もつと遠くー！ あんたあたしより身長高いんだから行けるっしょー」

瑞穂さんと俺は大体二十センチぐらいの差だったが、どうやら少なくとも瑞穂さんの足が着かないところまで行かないと満足しないらしい。

「はあー、分かりました！」

より沖の方を目指して、俺は再び歩き出した。

「わー、足着かないー深いーい！」

瑞穂さんは相変わらずのはしゃぎ様だった。

俺はまだ足が着いたが、肩から下は海水に浸かっていた。ここまで来ると浅瀬より人も少なくなってくるが、こんな沖に来たのなんて初めてだ。

「シュン、えいつ」

突然、瑞穂さんは浮き輪からはみ出た手で水をかけてきた。水しぶきはそのまま俺の顔に当たる。

「うわっ、何するんですか！」

「あはは」

瑞穂さんは笑ったまま再び両手を動かし、俺の方に海水をかけてくる。

しまいには浮いて漂っていたワカメまで手に取ってきた。

「あははじゃありませんから、もう！ お返しです！」

頭にワカメを乗せられたのを境にいつに反撃すると、瑞穂さんは更に投げてきた。

そんな投げ合いがしばらく続く。いつの間にか我も忘れていたが、こんなにはしゃいだのはいつ以来だろうと遠くの浜辺を見ながらふと考えていた。その時だった。

「あ、波大きい！」

「えっ」

回想していた俺にとって不意打ちで、勢いのあまり浮き輪からつい腕を離してしまった。

ふわっと浮く感覚。頭上まで海水が占める。目が開けない。息が出来ない。そして下の方に引っ張られていく。もう限界……

その時、強い力が片腕にかかるのを感じた。

「うっ、はあはあはあ」

頭の上にはまぶしい太陽の光と、雲一つない青い空が広がっていた。やっとの思いで呼吸をする。瑞穂さんは浮き輪を脱いでそれを片腕に掴んだまま、もう一方の腕で俺を引っ張りあげたようだった。

「よかった、間に合った。もう、気を付けなさいよ」

そう言われたが、余裕がなくて反応出来なかった。

一方で瑞穂さんは再び浮き輪の中に入ったが、そのまま俺の腕を離さないでいた。

今は珍しく、俺が瑞穂さんに頼りきっている。

そのまましばらく無言が続いた。

ふと瑞穂さんを見ると、さっきまでの笑顔と異なり顔色が曇っていた。

「……無理矢理連れて来てごめん」

俺の腕を掴んだまま、突然謝ってきたから驚いた。瑞穂さんはずっ

と下を向いていた。

「何、柄にもなく謝ってるんですか！　もう大丈夫ですから！　それに、俺も楽しいですよ」

「……そう。なら、良かったー！」

今まで沈んでいたが、瑞穂さんは再び笑い出していた。確かに溺れそうにはなったが、実際俺も楽しかった。まさかこんなに海で楽しめるなんて思っていなかった。

夕方近くになり、帰宅の途に就くために駅へ向かった。

二人で他愛も無い話をしつつ、俺の少し前を瑞穂さんは歩いていた。やがて、海にちなんで竜宮城に模して作られているのが有名な美しい駅の前に着くと、駅を背にして瑞穂さんは突如こちらに振り返った。

「また、来年来ようね！」

その言葉に自然と頷けた。

そんな俺を見て、瑞穂さんも「えへへ」と笑った。

その顔はまるで安心しきっているかのような満面の笑みで、俺も笑顔でつい返していた。

電車に乗り、やがて窓からあの観覧車が近くに見えてきた。

日帰りとはいえ遠出していたのもあってか、無事に帰ってきたという安心感を観覧車を見て感じた。

そして玉那駅で降りると、珍しく外食をして帰ってきた。

店を出る際、更に珍しいことに瑞穂さんが全額出したので驚いた。だが、それで終わりではなかった。

「あれ、何ですかこれ？」

帰って来て早速濡れた水着を洗濯機に入れると、喉の渴きを感じて冷蔵庫を開けた。

するといつも入っている野菜類の他に、小さめの白い箱が置かれていた。

「あ、忘れてた！ それ、開けてみて」

瑞穂さんがそう言うので冷蔵庫から取り出し、何なのかと思いながら開けた。

見るとそこには、ショートケーキやチョコレートケーキ、チーズケーキにモンブランが入っていた。

「あれ、これって……」

「シユン全然気付かないんだもん。はい、ハッピーバースデー！」

そう言われ俺は呆然としたが、ふと今日が八月三日であることを思

い出した。

「知っててくれたんですか?!」

夏休みの真ん中にあるせいで、小学生の頃から誕生日を忘れられがちだった。

だから祝われないことに慣れていたし、自分でも忘れているほどだった。

なのに、まさか瑞穂さんが知っているとは思わず、驚きを隠せなかった。

「シユン、ケーキ何が好きか分からなくていっぱい買ったし、好きな選んでいいよー」

そう言われ、段々と察しがついてきた。いつも突拍子のないことを言う瑞穂さんについて慣れていたが、考えてみれば急に海なんておかしい話だ。

俺に楽しんで欲しくて、瑞穂さんなりに今日のことを計画したのだろう。

「ショートケーキおいしい?」

ケーキを二人で突付いていると、瑞穂さんにそう聞かれた。

「おいしいですよ。それに、今日も楽しかったですよ」

そう返すと、瑞穂さんはフォークを持ちながら満面の笑みを浮かべ、俺の方を見た。

「シユンも楽しかったなら良かったー!」

それから瑞穂さんは熱心にチーズケーキを食べていたが、突如「あつー！」と声を放った途端に深刻そうな顔つきをした。それを見て、俺も焦った。

「ど、どうしたんですか?!」

不安になりつつそう聞くと、瑞穂さんは涙目になりながらゆっくりと俺の方を向いた。

「ケーキ……写真撮るの忘れたあ……」

思ってもいない言葉で俺は一瞬呆れながらも、慌てて気を取り直した。

「またクリスマスの時に食べるんですから、その時撮ればいいじゃないですか」

元気付けようと思いつつ、瑞穂さんは少し驚いたように俺を見る。

よく見ると少しだけ涙が出ているように見えたが、何でもないかのように瑞穂さんは振舞っていた。

「そう、よね……クリスマスがあるもんね。よしっ、食べよう！
うん、おいしー」

少し気になりはしたが、瑞穂さんは携帯を構えることなく再び食べることに専念していた。
いつもの瑞穂さんだった。

この時、？クリスマス？という言葉が自分から出て来るぐらい、冬になっても瑞穂さんが家にいるものだ、ごく自然に思っていた。それぐらい瑞穂さんの存在は俺にとって普通と化していた。

だから、その言葉が一体どういう意味を持つかなど全然考えていなかった。

第四章

「シューン、なんか野菜がいつぱい届いたよー」

午前中からいきなり玄関のチャイムに起こされたが、瑞穂さんが出てくれたらしい。

「あー……ありがとうございます」

バイト明けで俺は寝惚けながらもそう答える。

瑞穂さんが興味津々に段ボールの中の野菜を見ているのを布団の上で眺めていると、タイミングを計ったかのように俺の携帯が鳴った。

「野菜ありがと……あーもう、はいはい、お盆には帰るってば。じやあ、また連絡するよ、母さん」

電話を切ると、俺は少し溜息を吐いた。

最近、母さんが実家に帰って来いとうるさい。

この野菜もそれらの攻撃の一種だろう。

もうすぐお盆だからだろうけど。

実家はここから二時間もかからずに着く距離にあったが、うちは代々農家の家系だった。

今は兼業で、大学を卒業したら地元に戻って来て公務員になれと言われている。

まあ、たとえ経済学部に通っていても今の俺の成績じゃ無謀な話だけど。

将来のこと考えろと言われても、俺にはピンと来ないんだよな。

それより今は、こうやってコンビニでバイトしながら（田舎だけど一応）東京で自由気ままに暮らしてるのが一番気楽だ。

だから、実家に帰りたいとかあまり考えなかった。

……多分、身近にいるさい人がそばにいるから、寂しいとかあんま感じないのもあるだろうけど。

「シュン、実家帰るの？」

瑞穂さんがこちらを見ながらそんなことを聞いてきた。

心なしか、瑞穂さんが少し寂しそうな表情をしているような感じがする。

「んー、もうすぐお盆なので少しは帰らないとまずいみたいですね

……あー、めんどくせー」

瑞穂さんは「そっか」とだけ言うと、野菜を冷蔵庫にしまい始めた。

「俺が向こうに行ってる間、瑞穂さんの飯とかどうすればいいですかね？ 瑞穂さんの料理は食べられるようなもんじゃないですし…

…」

小さい頃からあまり食べなかった影響か、インスタント食品や冷凍食品といったものをあまり買い置きしなかった。

それもあって普段からいつも俺が食事を作っている分、俺がいない間の瑞穂さんの食生活がどうしても気になった。

何せ、ラーメンさえもまともに作れない人だ。

「馬鹿にしないでよ、コンビニとかあるんだから適当に食べるわよ！」

瑞穂さんは手を止めて言い返してきたが、自分で作ると言い張らないあたり本人も分かっている。

初っ端で披露してもらった黒ずくめの料理たちの味は瑞穂さんもよく知っていた。

瑞穂さんに悪いと思って俺は完食したが、その後一日中寝込むぐらいの代物だ。

一体、俺の家に来るまで瑞穂さんはどうやって暮らしていたのだろう。

そんなことを考えているうちに、瑞穂さんの実家の話って聞いた事がないなとふと思った。

大富豪の際にチラッと東京出身だと言っていたが、それ以上のことは聞いていない。

ま、いつか。別に知って何か変わる訳でもないし。

それにしても、実家いつ帰ろうかなあー。

そうやって珍しく早い時間から起きて考えたりしていると、再び玄関のチャイムが鳴った。

「また野菜かな？」

「いや、それはさすがにありませんか？」

俺はそう言っただけだったが、「野菜なら今度は大根がいいなあー」と勝手な事を言いながら瑞穂さんは玄関に向かった。

少しして、瑞穂さんが部屋に戻ってきたかと思えば、俺がよく着るような緑の柄シャツに黒のＴシャツ姿の大越を後ろに付けてきた。

「大越くんが来たよー」

俺の前だけならともかく、ダボダボのＴシャツに水色で縞々模様の半ズボンという部屋着の格好で大越を迎えるのはどうかと思ったが、瑞穂さん本人は気にしていないようだった。少しは恥ずかしいとか感じないのか……？

「大根じゃなくてごめんなさい、ただの大越です」

入って来た大越はにこやかな笑顔で俺に向かって謝ってきた。
「大根？と？大越？をかけているつもりなのか分かんが、少しウザいと思ってしまったのは気のせいだろうか。」

「なんだよ、朝っぱらから。俺が夜勤明けだって知ってるだろ」

「いや、起きるまで瑞穂さんと待っていようと思っていたのですが、起きていて良かったです」

そう言いながら、いつも使っている四角い形をした机の前に大越が座ったので、俺も布団から出てしぶしぶ向き合って座る。

だが、なかなか用件を話さないのが更に苛々した。

一方で、瑞穂さんはお茶の用意をしようと台所に立っていた。ラーメンが作れない瑞穂さんでも、紅茶を入れるのは何故だか得意だった。

「で、何だよ。用件は？」

「実は折り入って中井くんに相談があるんです」

丁度その頃になって、瑞穂さんは紅茶が入ったカップを二つ持ってきた。

だが、両手に持っているが、カップが熱いらしく何だが見ている方が危なっかしい状態だ。

慌てて二つ分のカップを俺が受け取った。

「え、あたしいちやまずい？」

瑞穂さんが聞くと、大越は否定した。

「いや、むしろ瑞穂さんがいてくれた方が嬉しいです」

それを聞いて瑞穂さんは嬉しそうに自分のカップと砂糖を持ってくると、俺と大越の間に座った。

瑞穂さんの紅茶には既に牛乳がカップの半分以上入っている。

ストレートじゃ飲めないと瑞穂さんは言って、いつも牛乳をたっぷり入れたミルクティーにしていた。

「実はですね、お盆のシフトの件なんです、僕の代わりに入ってくれませんか？」

「はあ？ 俺だって実家帰ったりするぞ」

俺らの話を聞きながら、瑞穂さんはミルクティーに砂糖をまず一杯入れた。

「店長がお盆の期間中、時給五十円アップって言ってますよ」

「んー、それはおいしいけど、でもなあ……さつき実家から電話あつたばっかだし」

瑞穂さんは笑顔で砂糖の二杯目を入れた。ついでに三杯目。今日は更に四杯。

やっと瑞穂さんは満足したらしく、スプーンでミルクティーをかき混ぜていた。

大越は驚いた顔で瑞穂さんを見ていたが、俺はこの光景に既に慣れていた。

そんな瑞穂さんを気にしつつ、大越は俺の方を見て頭を下げてきた。

「そこを何とか！ 僕も実家から帰って来いって言われていてですね……これ、後で瑞穂さんと一緒に食べてください」

そう言つて、大越が差し出したのは羊羹らしき包みだった。

「あー！ 『とらや』の羊羹だー！」

瑞穂さんは早速それを持って、台所に向かった。だが瑞穂さんが上手く包丁を使うとは思えない。俺も慌ててその後を追おうと立ち上がった。

「決まりですね」

まだ決まっていないうちで言おうとしたが、「うわぁっ！」という声が聞こえてそれどころじゃなかった。

結局、俺は大越をスルーして台所に向かった。

「どうして切れないのに台所行っただんですか！」

俺が怒ると、瑞穂さんは「だって……」と呟いた。

「だって、羊羹好きなんだもん。とらやの羊羹なんてなかなか食べられないし、つい」

「それで怪我したらどうするんですか、もう！」

ふて腐れている瑞穂さんをよそに、実際俺は少し怒っていた。無傷で済んだからともかく、もし怪我なんてしていたら……。

「いやあ、中井くんって思っていたより過保護なんですね」

馬鹿にしたようににやにやと笑う大越に「うるせー」としか言えなかった。

というか、手土産に瑞穂さんの大好物らしい羊羹を持ってくるとか、こいつもしかして計っていたんじゃないか……？

「でも本当、中井くんが引き受けてくれて助かりました、ありがとうございます」

悔しかったが、考えてみれば実家に帰らなくていい理由が出来たから案外いいことなのかもしれない。

日帰りでもいいから、一日ぐらいは帰ることにするとしても。

「あ、それと実はもう一つあって」

大越はそう言うのと、持っていた鞆からチラシらしき紙を取り出すと瑞穂さんに渡した。

「それ、今朝の新聞に入っています」

「大越、お前、新聞取ってるのか？」

自宅生ならともかく、一人暮らしで新聞を取っているというのは俺の周りではあまり聞かない話だ。まあ、佐藤先輩とかなら取っているんだけど、大越が取っているのは意外だった。

「何言ってるんですか中井くん、経済学部なんですから当たり前ですよ。ちなみに僕は主な新聞三紙の他に、英字新聞も読んでいます」

耳が痛い。それにしても、新聞四誌取ってるなんて月額でも馬鹿にならない額だ。

し、信じられねえ……… どんだけ金持ちなんだよお前………。

一方で瑞穂さんの方を見ると、さっきまで無心に羊羹を頬張っていたはずが、今では大越から渡されたチラシに釘付けだった。

俺も横から覗き込んでみる。

「えーと……『玉那ランド 夏の花火大会』……？」

それは、電車の窓からよく見えるあの観覧車がシンボルである遊園地の花火大会のお知らせだった。

「毎年やっているみたいなんですけど、年末であの遊園地が閉園するみたいなんです。これで最後ですし、もし良かったら今度の日曜日に行きませんか？」

確かにチラシをよく見ると、『花火大会は今年最後』と大きく書か

れていた。

玉那ランドは小さい遊園地で、どちらかと言うとメリーゴーランドのような子供向けの乗り物が多くて絶叫系好きの俺みたいな大人にとって物足りない所だと聞いていた。

だから行く気はなかったのだが、もう二度と行く機会がないかもしれないと考えると、一回くらいは行つともいい気がしてきた。

「瑞穂さんはどうします？　そういえば今年まだ花火見てませんもんね」

横から俺がそう聞いたが、瑞穂さんはチラシから目を離さなかった。不安に思つて瑞穂さんの顔を覗き込もうとすると、大越が言葉で遮ってきた。

「いや、中井くんは来なくていいですよ」

「うるせー。バイト休みなんだから行くに決まってるだろ」

「来なくていいですってば」

そんなやり取りを何度かしていると、瑞穂さんがチラシから顔を上げた。

「行く」

こうして、八月の終わりにある花火大会に三人で行くこととなった。

*

*

*

花火大会当日は無事に晴れた。

どうせだから昼間から玉那ランドに行こうと大越は誘ってきたが、瑞穂さんは嫌がった。

「別に花火大会だけでいいじゃない。あそこつまんないし」

「瑞穂さん、行ったことあるんですか？」

朝食の際にそう聞いたが、瑞穂さんは何も答えないままだった。

そして結局、夕方から大越と待ち合わせる事になった。

夕闇が残る中、バスが出ている中成大学・明王大学駅の東口で大越と待ち合わせた。

「お待ちしていました」

「おう。行こうぜ」

普段は中成大生ばかりだったが、駅前の人通りが普段より多く、家族連れが特に目だった。

そのことから、花火大会目的の人が多いと感じさせる。

「なあ、なんで閉園するんだ？」

玉那ランド行きのバスの中も人が多く、俺たち三人は立ったまま乗っていた。

瑞穂さんは珍しく会話に参加せず、下を向いている。
そんな中で俺が大越に聞いたのだった。

「確か、家電だったかな？ 母体の会社が赤字経営で、リストラとか経営縮小の嵐なんですよ。何せ、この不況ですからね」

「なんでお前が知ってるんだよ？」

土地勘があるならともかく、ここが地元ではないはずの大越がそんなスラスラ言えることが不思議だった。

「経済学部ですからそのくらい知ってますよ」

大越は涼しい顔で言った。

俺も経済学部で同期のはずなのだが、最近大越が遠く感じるのは気のせいなのだろうか。

まあ、俺が子供だけなのかもしれないが。

一方で、大越にとってはせっかく株稼ぎになりそうな場面だったのだが、そんな俺と大越のやり取りも瑞穂さんは上の空で聞いていなかったらしい。

瑞穂さんはずっと下を向いて何かを考えている様子だった。こんなことは珍しい気がする。

やがて、玉那ランドに着くとバスから人がゆっくりと降り始めた。

俺たちも降りて、入口のゲートに向かう。

今日の花火大会は地域還元として入園無料だとチラシにも書いてあり、ゲートは自由に行き来出来るように開放されていた。

園内に入ると、メリーゴーランドやコーヒーカップ、名前は分からないが動いて上がったたり下がったりする子供向けの乗り物が見えた。やはり、ここは仲間内で遊んだりデートしたりする学生向けの施設ではないようだ。

家族連れが目立つが、それでも花火大会のせいかな大学生らしき姿も

ちらほらはあった。

「観覧車と反対側の方に穴場があるんですよ。そっちに行きましょう」

大越が俺らの先頭に立って案内しようとするから驚いた。

「お前、ここ来たことあるのか？ 結構きついぞ、この坂」

「いえ、ネットで調べました。思ってたよりも坂ですけど、この先にいいところがありますから」

大越はそう言うと言いつつ歩き続けた。

俺も瑞穂さんを横に連れながら、大越のすぐ後ろにいた。

瑞穂さんは時々相槌程度に会話に入ってくるものの、今はただ黙って坂道を歩き続けていた。

機嫌が悪いのかよく分からなかったが、ともかく今日は珍しく瑞穂さんのテンションが低かった。

まあたまにはそんな日もあったっておかしくはないけど……大越は気にしていない様子だったが、俺にとって違和感はかなりあった。

「ここです、ここ。良かった、あまり人いないですね」

きつい坂道を上った先は山の中によくある、屋根も付いた休憩所みたいなおとろだつた。

元々丘陵を切り崩して作った遊園地だから坂道は多いと聞いていたが、このような休憩場所もあるみたいだった。

「ここからだ、観覧車の横に花火が上がるのをきれいに见れるんですよ」

「観覧車……」

準備良くレジャーシートを敷きながら大越が言い張ると、瑞穂さんが呟いた言葉が聞こえた。

俺が聞き返すと、瑞穂さんはそれ以上何も言わなかったけど。

やがて花火大会が始まると、花火は少し小さかったが人ごみに溢れることもなくまっすぐと花火を見ることが出来た。

空に打ち上がる花火のすぐ横には、この街一帯からよく見える観覧車のあの光があった。

「きれい」

俺の隣で瑞穂さんがそう呟いたのを俺は聞いた。

花火から目を逸らして瑞穂さんを少し見ると、目の前に広がる花火に心から感動しているかのような表情のように思えた。

瑞穂さんにとって、この花火は特別だったのだろうか。

「そういえば、もう二度とこの花火を見ることは出来ないんですね」

ふとそんなことを口にする、瑞穂さんは振り返って俺を見た。

何も変哲もない、ただの花火大会に変わりはないのだが、今年で閉園する以上ここで花火を見ることは二度とない。

そんなことを言いたくて言ったつもりだった。

けれど瑞穂さんは違うように受け取ったようだった。

「そうね。でも、それは何に関してもそうよ。同じ物を見れることは、二度とないわ」

瑞穂さんのその呟きは、今日のことだけを含めて言っていることではないと思った。

そう考えると、何だかその言葉は深かった。

だが、一日一日を大切にしなければいけないのは分かってはいるのだけど、実際それが出来ているわけではなかった。

大切にしたいのだけど、どうしたら大切に出来るのだろう。俺には分からない。

「僕もそう思います」

言葉に迷って言うのを躊躇っていると、先に大越がそう答えた。

何だか悔しかったが瑞穂さんの顔を見ると、何かを吹っ切ったのか段々表情が明るくなってきた。

「屋台いこー！ お好み焼き食べたいなーもちろんシュンのおごりで」

「何言ってるんですか、瑞穂さんの方が先輩でしょう！」

花火大会が終わる頃には、瑞穂さんはいつもの調子だった。

内心、少し安堵したのを本人には悟られないように思いつつ、後でこっそりお好み焼きを買って帰ろうと決めた。

「瑞穂さん、僕がおごりますってば」

「やったー、シュンと違ってやっぱ大越くんは分かってくれるわね！」

……前言撤回。

帰りはバスが混んでいるのもあって、三人で並んで駅まで歩いて帰った。

もう二度と見ることがないあの花火の色は、八月最後の夏休みの思い出として残った。

第五章

九月下旬になると、うちの大学はもう後期が始まっていた。

夏休み中はバイトの回数を多くしていたが、再びいつものペースに戻っていた。

一方で中成大はまだ夏休みで、瑞穂さんは今頃家でごろごろしている。

今日はバイトで、大越と組む日だったからギリギリに行っていた。ところが店に行くと、そこにいたのは佐藤先輩だった。

「おはよう……ございます？ あれ、なんで佐藤先輩が？」

いるはずもない佐藤先輩がいることで、驚きと戸惑いを隠せずに聞いた。

「オレはまだ休みだし、課題があるから交代して欲しいって大越が昨日言ってきたけど、聞いてないのか？」

「そうでしたっけ？ 聞いてなかったす……くそっ、大越の野郎逃げやがって」

最後の方は小声だったが、大越に課題があるということはもちろん俺にもある訳である。

でもバイトがあるからって優先して来たのに！

けれどみなちゃんの姿を見た途端、そんな思いも吹っ飛んだ。

みなちゃんは白いふわふわのスカートを着ていて今日もかわいい。

「おはよう、俊也くん。今日は仲良しの健太くんがなくて残念だねえ」

「そうなんだよ、すごく残念だよ！」

さつき自分で言った一言をなかったことにするぐらい、俺はみなこちゃんの前で取り繕った。

うちのコンビニは二つの大学がターゲットなのもあり昼間は混み合う分、民家がありませんためか夜勤の時間帯に客は少ない。それをいいことに、店内に出てからもレジを隔てて三人で話していた。

そんな時、突然ドアが開く音がした。お客さんが来たのかと思い、慌てて「いらっしやいませ」と俺と佐藤先輩が言う。だが、そこにいたのは瑞穂さんだった。

ドアが開いても、瑞穂さんは入口で立ち尽くしていた。いつも大越がいる日に来るのもあって、今日はいないことに驚いているのかと最初は思った。

だが瑞穂さんの視線は佐藤先輩、そしてみなこちゃんの方に向いていた。

「瑞穂ちゃん……？　なんで？　どういうこと？」

みなこちゃんがそう言うと、瑞穂さんは店の中に入らずにどこかへ走り出した。

みなこちゃんもそれを追う。

ドアチャイムの音だけが店内にむなしく響いた。

「えっ、追わないと！」

「中井、今は勤務中だ」

慌てて追おうとしたが、佐藤先輩は冷静にそれを止めた。
勤務中にも関わらず、むやみに店の外に出るのはご法度だ。
先輩の言っていることは分かるし、普段ならそれに従った。
けれど、嫌な予感がする。

「すみません、出ます！」

佐藤先輩の制止を無視し、店の外に出た。

どこに行ったのか分からなかったが、しばらくして店の裏の方から声が聞こえてきた。

よく聞き取れなかったが、一人分の女性の声しか聞こえない。理由は分からないが、瑞穂さんがみなこちゃんを何か怯えさせるようなことをしているような気がして心配になった。

「ダメですよ、瑞穂さん！」

俺が影から現れると、二人とも驚いた様子だったが、先に反応したのはみなこちゃんだった。

「大丈夫だよー、ちょっとお話してただけだから」

そうやっていつものように笑うみなこちゃんを見て、一安心した。だが瑞穂さんを見ると、下を向いたまま座り込んでいて、表情が分からなかった。

「久しぶりに会ったから、瑞穂ちゃんもびっくりしちゃったみたい。もう大丈夫だし、瑞穂ちゃんも帰るみたいだから。ね？」

みなこちゃんが笑いかけると、瑞穂さんは少しの間の後に頷いた。みなこちゃんの言い方はまるで、小さな子供を言い聞かせているかのようだった。

そして瑞穂さんは立ち上がろうとしたが、途端によろめいた。慌てて俺は瑞穂さんの横に行き、腕を持った。

「私、先にお店戻るね。俊也くんも早めに戻って来てね」

みなこちゃんはその言うて戻ったが、せめて駅までは送ろうと瑞穂さんを立たせた。瑞穂さんがおかしい。

「駅まで送りますから……瑞穂さんって、みなこちゃんと友達だったんですね」

髪が邪魔で、瑞穂さんの表情は相変わらず見えなかった。

だが腕を支えたまま二、三步歩くと、瑞穂さんは掴んでいた俺の手を勢いよく離れた。

「一人で帰れるから、いい」

俺のことも見ずにそう言うのと、駅の方に走り出してしまった。ただ、一瞬顔が見えると瑞穂さんが泣いているようにも見えた。

けれど、心配しつつ明け方近くになって帰ると瑞穂さんはいつものように寝ていた。

翌日起きた後も、瑞穂さんはいつも通りのわがまま全開で笑っていて、その様子から今更掘り返す気にならなかった。

それにみなこちゃんも何もないようだし、あの夜見た気がする涙はやっぱり気のせいだったのかと思うと段々気にしなくなっていた。

*

*

*

十月になって少しずつ肌寒くなってきたのだが、掛け布団が厚いせいか寝汗はまだかいていた。

そして瑞穂さんの生活は相変わらずだった。

中成大の文学部に通い本屋で働く瑞穂さんは、俺の背中が丁度いいと言って背もたれにして本をよく読んでいる。

俺も読書の秋に乗っかって、背中に瑞穂さんの重さを感じつつレポ―ト用の本を読んだりするなど、そんな風に過ごしていた。

さすがに服はあの黒い皮のキャリーケースから出し入れしていたが、もう三ヶ月以上過ごしているのもあって着々と部屋に瑞穂さんの物が増えていった。

棚の上に置かれたドライヤーに櫛、部屋に干されているキャラクタ―柄のタオル。

……？八海山？の他に？笹一？なんて知らない銘柄の酒瓶が棚に並んでいるのはまあともかくとして、どれも男の俺には縁がないものだった。

その日も俺はバイトに向かっていた。

大学周りは木々に囲まれているのもあって、駅から歩く際に見た空には、地元ほどではないが星がいくつか見えたのを覚えている。

星がよく見える、空気が澄んでいる夜だった。

二十三時近くになってレジ担当の大越と分けられると、バックルーム

で上着を着てからウォークインと呼ばれる冷蔵庫に入った。

ウォークインは、陳列されたペットボトルを後ろから補充しつつ、メールの確認や仕事中の息抜き（と書いてサボりと読む）が出来るほぼ唯一の場所だ。

そこで寒さに耐えつつ、一人なのをいいことに少し手を抜いて作業していた。

「あの、俊也くん。ちょっといい？」

ペットボトルの箱を開けて補充していると、扉が開く音の後に女の子の声がした。

そちらを向くと、何故かみなこちゃんがウォークインに入ってきていた。

「うわあ、やつぱ寒い〜」

「みなこちゃん？！ これ着ていいよ！」

慌てて、自分の着ていた作業用の上着を脱いで渡すと寒かった。もちろん後悔はない。

「うう、ごめんね。ありがと〜」

「どうしたの、こんなところに？ 終電大丈夫？」

店から一駅離れたところで、みなこちゃんはオーナー夫婦と一緒に暮らしていると聞いた事があった。

「うん、もう帰ろうと思って〜。でも、その前に言いたいことがあるから」

「ん、どうしたの？」

向かい合ったまま俺が聞くと、みなこちゃんは俺の顔色を伺うかのようによつて上目遣いで見てきた。やばい、すごくかわいい。

「あのねえ」

みなこちゃんは一呼吸置いた。いつもとは少し様子が違っていて、俺まで意味もなく緊張してきた。

「あのね、私と付き合ってくれないかなあ？」

自分の耳を疑った。夢なのだろうか？

夢だったらここで寝ていてそのまま凍死するのだろうか？

いや夢でもいい、なんだっていい！

だって、あのみなこちゃんが俺と、つ、付き合うだなんて！！

そうやっていつの間にか一人で盛り上がっていると、不安そうに俺を見るみなこちゃんに気付くまでに時間がかった。

「…………あ、ごめん、もちろんだよ！俺こそ、付き合ってください！」

そう言つと、途端にみなこちゃんは笑った。

「良かった、じゃあ私これで帰るから。お疲れさま」

「ああ、うん！お疲れ様」

上着を返してもらつと、みなこちゃんはウォークインを出て行つた。

「俺がみなこちゃんと付き合つなんて…………ふふふふふ」

結局、終わるのが遅いのを心配した大越が来るまで、寒さも忘れて頭の中で妄想を繰り返していた。
そのせいで大越にはすぐにバレてしまった。

第6章

その後、遠出したりする話はまだなかったが、バイトがない日に時々みなちゃんと会っては喫茶店などで楽しく話した。

そして街中がクリスマスのイルミネーションで輝く頃になって、「俊也くんって一人暮らしだね？ 今度のクリスマスイブ、おうち行ってみたいなあ」とみなこちゃんの方から言ってきた。

大学の友達が遊びに来ると言うと、今まで何かと理由を付けて断っていた。

だが嬉しさのあまりつい、「もちろんだよ、是非来てよ！」と言っ

てしまった。そして帰り道の途中でも、みなこちゃんがうちに来ると考えると色々

々と妄想が止まらなかった。

そのせいで、家に着くまで瑞穂さんのことに気付かなかった。

「おかえりー、今日も遅かったねえ。作ってくれたカレー、先食べるよー」

玄関のドアを開けて中に入ると、俺が行く前に作ったカレーを瑞穂さんは食べていた。

みなこちゃんと付き合ってから、瑞穂さんは家にいた。

大越には口止めしていたから気付かれていなかったし、既に暦はもう十二月で季節は冬だった。

「彼女が出来たから出て行って欲しい」なんて今言ったら、瑞穂さんはどうなってしまうのだろうか。

そう考えると、何故だか言えなかった。

何より、瑞穂さんとの生活は楽しかった。「何かあったりするんじゃないですか？」と夏休み前に大越から言われたが、そんなことは何一つなかった。

けれどもとかく、憧れていたはずの一人暮らしよりも瑞穂さんと二人の生活の方がいいというの間に思っていた。

「カレーどうですか？」

「うん、おいしいよー」

自分の料理を『おいしい』と食べてくれる人がいてくれるのは素直に嬉しい。

「じゃあ俺も食べますかね」

結局、台所の食器棚から自分のカレー皿を出しながら、さっきの話をすることにした。

「あの一、瑞穂さん」

距離のせいでいつもより大きな声で話しかけると、瑞穂さんは食べながら「なにー？」と返してくる。

「あのですねー、来週の木曜、午後からでいいんで家空けてくれませんかねー？」

瑞穂さんは食べ途中だったみたいで飲み込んでいるらしく、返事が返ってくるまで時間がかかった。

「いいよ」

ご飯とカレーを皿によそった頃になって、そう返事が聞けた。
良かったと安堵しつつ、今までにないぐらいにクリスマスイブが来るのを期待して待った。

*

*

*

そして二十四日の朝。昨日から冬休みだったが、もちろんいつもより早く起きた。

だが起き上がったって背中を触ると、やはり濡れている。

もう十二月なのに今だに汗をかいていた。実は汗つかきだったのか、俺？

ともあれ、この日のことを考える度に浮き足立っていた。何せ、今日が初めての密室デートだ。

もし、あのみなちゃんと……キキキキスなんてして………うわあ、俺どうすれば！

もう何度目か分からなかったが、朝から自然と顔が緩んでしまった。

そんなこんなで、みなちゃんとは外で会ってお昼を食べてから家に来る予定だったから、俺は早くから家を出た。

瑞穂さんは家を出る時にまだ寝ていたが、午後までには家を空けてくれるはずだったし、部屋の掃除は前日に全部済ませていた。

だから何もかもが万全で、安心してみなちゃんを招き入れられると思っていた。

「ここが俊也クンのおうち？」

白いダウンジャケットの下に、ピンクのフリルが付いたワンピースを着たみなちゃんと一緒に家に戻ったのは午後一時近くだった。扉の前で、先に歩いていた俺は足を止める。

「そうそう、ここなんだ。見た通りボロくてごめんね」
「うっん、全然だよ」

明らかに気を遣ってもらいながらも、みなちゃんと並んで鍵を入れてドアを開ける。
そして中に入ると捨て忘れたのか、玄関にゴミ袋があるのが内心気になった。

「わあ、これが俊也クンのお部屋なんだあ」

奥の方に進むとみなこちゃんはそう言ったが、一方で驚きのあまり俺は言葉が出なかった。

棚に並んでいたはずの酒瓶は一つも残されていなかった。
それ以外にも、部屋中に散らばっていた自分の物ではなかった物たちは、あるはずの場所に何一つ置かれていなかった。

何より、部屋の隅に置かれていたあの黒い皮のキャリーケースがなかった。

瑞穂さんがいた形跡が、どこにもなかった。

あたりを何度も見回す俺に「どうしたの？」とみなこちゃんは声をかけてきた。

だが、それに答える余裕は全くなかった。

ふと、ゴミ袋があった気がして玄関に行く。

青い色の燃えないゴミ袋を開けると、中からは夏に使ったあの浮き輪やビニールバックが出てきた。

『また、来年行こうね』俺が頷くと、無防備に笑顔を見せた瑞穂さんの姿が過ぎる。

他にも何かないと手当たり次第探す中、玄関の新聞受けを開けると封筒が一通入っていた。

慌ててそれを開ける。中には瑞穂さんにいつか渡した合鍵と、一枚のルーズリーフが入っていた。

ルーズリーフの方に意識が向いていると鍵を落とし、無機質な音が響く。

けれど拾う気にはなれなかった。

手が震えながらもルーズリーフを広げる。

中には詩のようなものが書かれていたが、パツと見ただけでは意味が読み取れない文章だった。

苛立ちながらも、それを丸めてジューパンの後ろポケットに入れた。

「俊也くん、どうしたの？」と後ろから心配そうな声音で再び尋ねられた。

みなこちゃんの方を俺は振り返る。

「ごめん！」

それ以上は何も言えなかった。

ともかく、心臓の音だけが体中に響く。瑞穂さん！

「どこ行くの、俊也くん?! 待って」

みなこちゃんの言葉が終わらないうちに、俺は玄関から飛び出していた。

*

*

*

「どこにいるんだ?!」

焦りのあまりついそんな言葉が出ると、途端に周囲の視線が俺に集まる。

だがそれも一瞬で、何事もなかったかのように人々は歩き出していた。

瑞穂さんとはもう、会えないのか？

あれから勢いで飛び出し、玉那駅に来ていた。

クリスマススイブなのもあって、昼下がりの今も曇り空だったが駅前の人通りはいつもより多かった。

そんな人混みの中を見回しながら走り歩く。

あの目立つ黒い革のキャリアケースを引きずる姿を目印に探すが、瑞穂さんの姿はどこにもなかった。

思い起こせば、こんな時に瑞穂さんがどこに行くかなんて見当も付かなかった。

よく行く場所どころか、バイト先がどこの本屋なのかさえも知らない。

俺と暮らすまでどこにいたかも聞いた事がなかった。

頭の中で浮かぶ瑞穂さんは理不尽で暴君で突拍子もないことばかり言って、でもいつも笑ってて……それから……それから？

瑞穂さんの趣味は？

瑞穂さんは大学で何を学んでる？

瑞穂さんの出身校は？

瑞穂さんの好きな物は？

瑞穂さんの誕生日は？

俺は何一つ、答えられない。

「長谷川瑞穂って、一体誰だ……？」

走り続けた足を止めて、そう呟く。半年近く一緒に暮らした相手のことを何一つ知らない。

……いや、知ろうとしなかった。そんなことに今更気付いた。

探す宛もなく、駅前の広場で途方に暮れた。

手の冷たさを感じ、癖でついジューパンの後ろポケットに手を入れると、中に紙の感触に気付く。

取り出してみると、家を出る時に勢いで入れたあのルーズリーフがくしゃくしゃになって入っていた。

焦っていたせいで中身をちゃんと読んでいなかったことに気付き、もう一度広げる。

『君にとっては

座る席がなくて困っていた人に

隣の席を譲ってあげたら

その人は眠ったまま 寄り掛かってきたけれど
疲れているのだな と、肩に重さを感じても

起こさずに そのまま枕になってあげた

ただ、それだけの事。

それが あたしにとっては

求めていた優しさで
ずっと感じていた温かさだった
ただ、それだけの話。

けれど二人とも もういないことに
もう、耐えられなかった。」

「これって、どういう意味なんだろう……？」

訳が分からない。この詩が何を言っているのか、俺には理解出来なかった。

けれども、ルーズリーフが入っていた封筒の中には渡していた合鍵があつたから瑞穂さんがこれを書いたことは確かだったし、手掛かりはこれしかなかった。

大学の教養科目の授業か何だったか忘れたが、『詩は何も言っていない。だから何度でも読むんだ』と偉そうに言っていた教授がいたけれど、この詩の中に伝えたいことが入っていると俺は思う。
だからこそ、それが分かりたくてもう一度よく読んだ。

「……『二人とも』って、どういうことだ？」

二人のうちの一人は俺だと何となく思う。

だったらもう一人は誰だ、なんて聞かれても分からなかったが、一応俺に向けて書かれているのだから自分も知っている人のような気がする。

だが瑞穂さんの交友関係さえも俺はよく知らない。

けれど、思い出せ。半年の間に、必ずどこかで……そうだった、肝心なことを忘れていた。

幸いに駅は目の前で、ポケットにある財布には定期が入っている。
改札をダッシュで越え、来たばかりの下り電車に飛び乗った。

*

*

*

「……どうした？」

中成大近くにあるアパートの玄関。
突然押し掛けた俺に、黒のズボンに上は白のYシャツ姿で出迎えた
佐藤生人先輩は少し驚いた様子だった。

「お話が、あります」

三ヶ月前、瑞穂さんがみなちゃんと偶然顔を合わせた日。
あの日はつい、みなちゃんと瑞穂さんのやり取りに意識がいつて
しまっていた。

だが店に入った時、瑞穂さんが先に視線で捉えていたのは佐藤先輩
の方だった。

その様子から、少なくとも二人が知り合いであるように思えた。
俺の表情を見て、佐藤先輩も何かを察した様子だった。

「ああ、いいだろう」

招き入れられて靴を脱ぐと、廊下を抜けて部屋に入った。

前に大越を含めたバイト仲間と大勢で来たことがあったが、改めて
室内を一望する。

同じワンルームでも俺の家と比べて三倍くらいの広さを感じる。
室内は白や黒を基調としたシンプルな家具でまとめられていた。
それもあって、ダイニングキッチンにある食器棚の中でも、手前に

置かれたパステルカラーの優しい色をした赤と青のそれぞれ二つのマグカップがこの部屋に不似合いで妙に目立っていた。勧められた椅子に俺が腰掛けると、佐藤先輩は白の無地のカップに紅茶を入れてくれた。

「ミルクと砂糖はいくつ必要だ？」

「いえ、なくて大丈夫です」

そう答えると珍しく先輩が少し笑ったので「どうしたんですか」と聞いた。

「ミルクと砂糖を好む奴がいたからもんだからな、つい。そいつはミルクがないと飲めないからってコップ半分まで牛乳を入れて、砂糖なんて軽く五杯は入れていた」

まるで何かを懐かしんでいるかのような表情を佐藤先輩はしていた。こんな先輩を見るのは滅多にない。

そういえば、大量の砂糖と牛乳が入ったミルクティーを瑞穂さんはよく飲んでいた。

「……長谷川瑞穂さんを、先輩はご存知なんですか？」

先輩は深く頷きながら、テーブルを挟んだ向かい側に座った。

「ああ。知っているというより、瑞穂とは高校からの友人だ。お前のところに行くよう言ったのもオレだしな」

「えっ！？　そうなんですか？」

半年の間、瑞穂さんと過ごしていたがどちらも初耳の話だった。

「なんだ、瑞穂から聞いてないのか？」

心の底から驚いている俺とは対象的に、佐藤先輩は涼しい顔をして紅茶を啜っていた。

「聞いてないですよ！ それに、先輩があ瑞穂さんと高校の時からずっと友達？！ 全く信じられないんですけど……でも、なんで俺の家を教えたんですか？」

「一人暮らしを始めるって言ってたし、バイト先に住所も置いてあったしな」

確かに、住所がどこから漏れたかは不思議に思っていた。だが、それよりも聞きたい事があった。

「そうじゃなくて、どうして先輩は瑞穂さんに俺の家に行くように言っただんですか？」

すると、思ってもいなかったような言葉を佐藤先輩は発した。

「お前なら、一番信用出来ると思ったんだ」

さっきと違って淡々とはしていたが、佐藤先輩は笑うことなく俺をじっと見ていた。

「どついう、意味ですか？」

尊敬している先輩からの言葉に驚きを隠せなかった。先輩は立ち上がり、キッチンの方へゆつくりと歩く。しばらくして振り返ると、俺の方を見た。

「オレと瑞穂が出会ったのは、高校一年の終わりだった」
そしてゆっくりと、先輩は話し始めた。

第七章

昼前から白く重い雲に街中が包まれていた。

それでも、大学の最寄りから新宿方面に向かつて一駅の場所にあるこの街も、クリスマスの飾り付けによつて赤と緑の色が溢れている。バイト先である？ 晃文堂書店^{こうぶんどう}？の店内にもクリスマスツリーが飾られていた。

「長谷川さん、お疲れさん」

「お疲れ様です」

いつものように店長に挨拶して店から瑞穂は出る。

だが、いつもと違って夕方からではなく開店から昼過ぎまでという時間にシフトを入れたため、店を出ても外が明るいことに違和感があつた。

ジーンズに黒のコートを羽織っていたが、それでも十二月の寒さは身に染みた。

荷物になるキャリーケースはバイト前に駅のロッカーに預けた。

少し距離があつたが、引き取りに再び駅に向かうと歩く。

その途中で、紺一色のスカートとブレザーに赤いネクタイを締めた女子高生二人組と擦れ違った。

その二人が通り過ぎると、瑞穂は振り返る。

あれは、瑞穂が卒業した高校の制服だった。

紺一色は地味そうに見えて、近隣の高校はチェックばかりなのでかえって目立つ。

なので、少し前までは地域住民なら一目見て学区三位の高校のもの

だとすぐ分かる。

だが瑞穂が卒業した翌年の入学生から、紺の上に水色の線が入ったチェックのスカートに変わった。

したがって、紺のあの制服を着ているのは今の三年生しかおらず、瑞穂も久しぶりに懐かしい制服を見掛けた。

ふと、駅に続く道の途中にベンチを見付けて座った。

あの制服を着ていたのはもう二年以上も前だと考えると、必然と高校時代のことを思い返す。

更に遠くにあの観覧車が見えると、思考の海から逃れられるわけもなかった。

幸いなことに時間なら果てしなくある。

瑞穂はベンチに深く寄り掛かると、ゆっくりと深く息を吸った。

*

*

*

両親は幼い頃に離婚した。

母には既に男がいたため瑞穂は父方に引き取られたが、その父も間もなく再婚した。

その再婚相手は父よりも随分と年上で、瑞穂より少し年上の男の連れ子が二人いた。

義母はもちろん、父もその子たちには優しくしたが、両親ともに瑞穂には辛く当たった。

例えば、父は上の子二人だけ動物園や遊園地に連れて行ったり、自転車プレゼントしたりした。

だが、瑞穂は自転車どころか衣服さえも満足に与えられず、常に義兄たちが着なくなったボロボロの男児用の服を着ていた。

食事も義兄が残したものを食べられたらまだ良い方で、食事が余らなかった際は瑞穂の分はなかった。

瑞穂の顔が実母似だったのを気に食わなかった義母はともかく、父までもそんな瑞穂を見なかったことにし、幸せな四人家族の一人として過ごしていた。

「お父さん、どうしてあたしにはくれないの？」

ラジコンをプレゼントされて喜んでいる義兄たちを見て、父に向かつてたった一度だけそう聞いた事がある。

別にラジコンや何かが欲しい訳ではなかった。

ただ、何故なのか聞きたかった。

「お前に優しくすると、みんなやきもちを妬いて大変だろう？ お前のためでもあるんだ。それに、お前もお父さんに幸せになつて欲しいなら我慢しなさい」

父は小声でそう言うと、義母からの視線を感じて「しっしっ」と、瑞穂を手で払った。

まだ若かった父は余裕が無く、今度こそ結婚生活を成功させたいと思いい、新しい妻に頭が一切上がらなかった。

そんな姿を見てきた瑞穂は父の立ち位置が分かったし、幼心に父の

幸せを祈る気持ちはあつたので期待するのはやめた。

小学校の頃からその身なりを理由にいじめられることが多々あり、瑞穂は読書に没頭した。

学校の図書室はタダで本がいくらでも読めた。

本の世界にいる間は、外の世界の事なんて忘れていられる。

その分、下校時刻のチャイムが本気で憎かった。

チャイムが鳴ると、本を抱えて外に出るしかない。公園に行くと同級生にいじめられるし、日が暮れてだいぶ経つまで家には入れてもらえなかった。

結局、スーパーのベンチで読んだりしたが同級生に見付かる事も多く、本を読む場所には困った。

中学生になって義兄が使っていたボロボロの自転車を貰い、二駅離れた市立図書館に行く術を身に付けるまでその苦労は続いた。

中学でも成績は比較的優秀に保ち、返済不要の奨学金を糧に高校に通える目途はついた。

だが家庭環境は何も変わらないままで、父は相変わらず義母の味方だった。

そして高校入学前の春休み、高校二年生で次男である義兄からついに暴行を受け、それから何かが吹っ切れたかのように家に帰らなくなった。

瑞穂はそれほど美人というわけではなかったが、夜の街を一人で歩くような少女に群がる男は多かった。

瑞穂がああ紺色の制服を毎日纏うようになる頃には？彼氏？という名の男を作っては、男のマンションやアパートを転々としていた。

そんな日々を送るまではずっと、瑞穂は一人だった。

けれど、体さえ許せば男たちはいつでも一緒に眠ってくれた。

体温の温かさがすぐそばにあること。

それは瑞穂にとって、こんな自分でも誰かに求められているように
思えて嬉しかった。

そんな生活をしつつ、高校には毎日通っていた。

都立の進学校だったが山間に位置し自然に囲まれていたため通学は不便だったが瑞穂にとって授業は苦痛どころか、知らないことを知れるので楽しみだった。

しかし一方で、テレビを見る環境がなく携帯電話も持っていなかった瑞穂はクラスの女子と話が合わず、学校でもずっと孤立していた。それでも、高校で初めて友達が出来た。

良い子だとクラスでも評判の女子で、周りの目を気にせずに瑞穂と接し、流行の話題ではなく学校の話などをしてくれた。

結局高校時代は当たり障りのない話をするぐらいの関係だったが、それでも瑞穂にとってかけがえのない友達で、本来持つ明るさをその子の前では出せた。

しかし教員の前の瑞穂は大人しく授業態度も真面目だったため、夜に男の家に行くような生徒だとは担任さえも思わなかった。

面談の際も義母は適当に話していて、家に帰っていないことも担任は気付かなかった。

結局、高校に上がってから表面は明るい五人家族のままだった。

そして相変わらず、読書だけが唯一の楽しみだった。

高校の図書室は小中と比にならない規模で、部費が払えなかった瑞穂は部活に入らず、夕方までずっと図書室で本を読んで過ごしていた。

成績が悪いと奨学金が打ち切られてしまうのもあり、テスト前だけ

は必死に図書室で勉強した。

そんな生活で最終下校時刻まで図書室に毎日いると、放課後に残るメンバーは限られてくる。

進級が近くなった季節。

まだ気温は低く、少しでも温かな日差しが入るように瑞穂は窓の近くの席を選んでいた。

そんな窓際の中でも一番端の席が特にお気に入りで座っていると、自分と向かい側の席にいつも同じ男子が座っていることに気付いた。

黒髪で身長はやや高めで、読んでいる本のタイトルを見ると歴史小説が多かった。

制服を着崩している男子はよくいたがその人は第一ボタンだけ外し、ネクタイも少し緩く締めているぐらいだった。

その程良くルーズそうな姿が、融通の利きそうなイメージを瑞穂に少し抱かせた。

顔に覚えはなかったが、後に教室が離れている特進クラスの人だと知った。

相手は瑞穂の存在に気付いていないようだったが、最後まで残っていると図書室を出る時間が大抵重なり、必然と門を出るまでの道のりが一緒になる。

だが寡黙そうで話し掛けにくく、瑞穂と言葉を交わすことはなかった。

そして春休みも近付いた日、春の日差しが気持ち良過ぎてその日はついうたた寝をしてしまった。

「長谷川さん、いい加減起きてちょうだい。もう最終下校時刻よ」

他の生徒たちも帰り支度をしている中、仲良くなつた司書教諭に起こされて瑞穂も鞆を持つと最後から大体二番目に廊下に出た。

そのままいつものように生徒用玄関に向かって靴を履き替えたが、ドアを押しても開かなかった。

「どうしよう、出られないよ……」

独り言のようについ呟くと、途端に後ろから声が聞こえた。

「職員用玄関からなら出られるぞ」

振り向くと、図書室でよく一緒になるあの男子が瑞穂のことを見ていた。

その時初めて、その男子の声を瑞穂は聞いた。低かったが、よく通る声だった。

それが、佐藤生人だった。

それまでクラスが離れていて全く話したことがなかったが、何となくその存在を気にしていたのもあり、そのまま駅まで歩きながら会話を交わした。

それ以来、図書室で顔を合わせた後、駅まで歩いて一緒に帰ることが多くなった。

生人は吹奏楽部に入っていたが、活動日以外は図書室に顔を出した。そして生人も瑞穂と同じで携帯を持ってなく、流行などには興味がないような人だった。

そんな二人は好きなジャンルは異なっていたが、本の話題で盛り上がる事が出来た。

その頃、瑞穂は高校卒業後も大学で学びたいとは思っていたが、進路についてそれ以上は考えていなかった。

だが、生人とよく話しているうちに、自分は心の底から本が好きだと気が付いた。

そこで図書館司書になりたいと思い始め、少しずつだが周辺にある大学の文学部を調べるようになった。

しかし瑞穂は理系科目が比較的苦手でレベル的に都内の国公立大は考えられなかったが、私大の殆どは授業料が高額で目指すのも躊躇われた。

生人は、言葉数は少なかったかもしれないが聞き役として長けていた。

相槌を入れて話題を引き出すのも得意で、それもあってか瑞穂は進学への不安を話した。

更に、そうやって相談していくうちに、今まで誰にも言えなかった家庭の事を生人には話せた。

「家なんか帰りたくない。だから、今日もあいつんちに行くの」「そうか」

大学進学を考えるにはテスト前以外も勉強しなくてはならなかったが、男の家に行ったら勉強どころではなかった。

生人はそんな瑞穂をじつと見ながら、否定も肯定もしなかった。

瑞穂がいつも以上に荒れたのは、高校二年生だった冬のある日のことだった。

荷物を取りに久し振りに帰って自室に籠もっていると、居間の方から張り上げた声が聞こえてきた。

「いつまであんな他人の面倒見なきゃいけないわけ？ いい加減出て行かせてよ」

義母が話している相手は父のようだったが、父の声は聞こえてこない。

「……出て行けるなら、とっくに出て行ってるわよ」

そう言いながら、目から涙が溢れているのは何故なのだろう。

結局、珍しく父から後日話し掛けられ、高校卒業と同時に出て行くよう言い渡された。

「ごめんな、俺は何もしてやれない」

「ううん」

そう返すことしか出来なかった。

すっかり老け込み、昔と違って瑞穂を追い込むような言葉を父は言わなかったが、いつになっても父は無力だった。

瑞穂は幼かったあの頃から、父に期待するのはやめていた。

だが親からの援助もなく、借りた奨学金だけで都内で一人暮らしをするのは現実的な話ではなかったし、父の稼いだお金はあの女が全て握っていた。

履歴書の保護者欄を埋めてくれる人がいる訳もなく、バイトも出来なかった瑞穂は修学旅行に行くお金さえもなかった。

このままでは、高卒で就職するしか道がなくなってしまう。

翌日図書室で生人に会った途端、瑞穂は涙をこらえられなくなってしまった。

生人はそんな瑞穂を学校近くの公園へ連れ出した。

「あたし、大学行きたい」

雪が降り出しそうな白い空の下で、瑞穂は泣きながらもそう訴えた。そんなわがまま、今まで誰にも言えなかったが生人にだけは言えた。

「お前、中成大の文学部行けよ」

生人から突然そう言われ、驚いた瑞穂は顔を上げた。

中成大は都内にある私大で、公共機関を使つとここから一時間近くかかる距離に位置していた。

「中成大の奨学生制度なら、センター試験で学部ごとに上位五人以内に入れば授業料四年間無料だ」

「上位五人?! いくら文系教科だけでも、あたしなんか入れるわけないじゃん! それに、授業料がタダでも、家借りたりするお金なんかないよ……」

特進クラスの生人とは違い、瑞穂は奨学金を支給されてはいたが全

体では中の下レベルだった。

何より大学に通う以前に、生活が成り立たなければ最悪フリーターになるしかない。

だが、生人は譲らなかった。

「お前なら出来る。それに、オレが行かしてやる」

「え……？」

その言葉の驚きのあまり、瑞穂は顔を上げた。

「中成ならある程度レベル高いし、受かったら一人暮らししていいって親から言われてる。オレは理学部受けるから、お前も文学部受ける」

言われた意味がすぐには分からず、瑞穂は何も言えなかった。だが、生人は淡々と続ける。

「一人暮らししたら、オレんとこ来いよ。あ、家賃と食費と水道光熱費は半分払えよ」

願っても無い話だった。

その条件なら生活も出来るし、更に中成大の文学部は司書資格取得に配慮された授業カリキュラムが組まれていることは知っていた。

「本当に……？」

「ああ」

瑞穂の人生の中で、ここまで瑞穂のことを考えてくれる人なんて誰もいなかった。

確かに中成大は難関大と呼ばれる大学だった。

無謀な話かもしれない。けれど、それしかないと思った。

何より、『オレが行かしてやる』と言った生人を信じてみようと思
った。

「……うん。あたし、中成大受けるよ」

瑞穂がそう言うと、生人は満足そうに笑った。

「よし、決まりだな。じゃあ、今日から毎日帰りに中央図書館寄
るぞ。あそこは十時まで開いてるしな」

「えっ、でも……」

今日も男の家に行く約束がある。だが、生人の意思は変わらなかつ
た。

「お前、大学行きたいんだろ？　じゃあ行くぞ」

生人はそれ以上聞く耳を持たずに歩き出し、瑞穂も慌てて追った。
それ以来、生人の部活が終わるのを図書室で待つこともあったが、
学校を出ると生人と一緒に中央図書館に寄って毎日勉強するようにな
った。

生人の親は共働きで門限も緩く、お互い十時まで図書館で勉強出来
た。

それに加えて土日も昼間から勉強する生活で、男と会う余裕がなくな
った瑞穂は必然と夜だけは自室に帰って寝るようになった。

だがそれは、苦痛以外の何でもなかった。

義兄のこともあったが、ドアの向こうにいる義母からの「どうして
帰ってくるのよ」などの罵声で眠れない日は多々あった。

「はやくここからだして……………いくと」

ベッドの中で泣きながら呟いたが、『大学に受ければ、生人がこの檻から出してくれるんだ』と信じ、目を閉じて耐え忍ぶ日々を過ごした。

生人は元々成績も優秀で、瑞穂の良い先生役となってくれた。

塾にも予備校にも通わずに、どちらも中成大に奨学生として合格出来たのはそんな日々のおかげだった。

そして瑞穂は高校卒業と同時に、キャリアケース一つで家を出た。

駅前から続く桜並木の下を歩いていると、落ちてきた花びらの色が黒のキャリアケースの上で映えた。

そのまま歩き続けると、前に地図で教えてもらったアパートに着き、ドアチャイムを押すと生人が出てきた。

「ほんとに来ちゃったよ」

「ああ」

新居であるアパートの玄関先で生人は微笑むと、瑞穂を温かく迎え入れた。

家電は生人の親が買い揃えてくれていたが、まず生活用品を揃えようと、二人で買い物をして街に出た。

シャンプーやリンス、歯ブラシに二人分の食器……それに。

「あ、これかわいくない？」

瑞穂が手を伸ばしたのは、赤と青のパステルカラーがそれぞれ基調の、二つのマグカップだった。

「どっちか買お！ あーでも、どっちもかわいいなあ……どうしよう」

そうやって瑞穂が迷っていると、呆れたように生人が言葉を挟んだ。

「どっちも買えばいいだろ。一個は引っ越し祝いに買ってやるよ」

「やったー、じゃあ二つ買っちゃおう！」

そう言つて、瑞穂は二つのマグカップを他の物と一緒に買い物カゴの中に入れた。

それ以来、お互い決めた訳ではなかったが、二人で紅茶を飲む時には赤が瑞穂で青を生人が使うようになった。

どちらが紅茶を入れようとそれは常で、瑞穂にとってはそのマグカップがまるで二人の象徴のように思えた。

元々気が合っていたのもあって、生人との同居生活は楽しく過ごせていた。

だが夜になって眠ろうとすると、時々どうしても寝付けなかった。

不安で涙が止まらなくなると、横で眠る生人の布団に瑞穂は潜り込んだ。

「どうしたんだ？」

最初のうちは生人もそう聞いていたが、布団から追い出すようなことはしなかった。

「夜に溶けてしまいそうで、怖い……自分がいなくなっても誰も悲しまないんだって、そう思うとどうしようもなく怖い……」

実家では自らの存在さえも否定され続けていた。

そんな瑞穂にとって暗闇は敵で、孤独を感じさせる存在だった。

それは昼間のあの明朗さとは対照的だったが、そんな弱さも持つて

いた。

生人は何も言わずに、横にいる瑞穂の背中をさすった。

そうされると、生人の布団の中で安心して眠りにつくことが出来た。

「付き合っ てないのに、そんなのおかしいよ」

高校時代の友人と久しぶりに会った際にあの生人と暮らしていると
言っと、そう返されたことがあった。

けれど瑞穂は、その非難を疑問を感じた。

生人に恋人はいないし、自分たちは？ 友達？ なのだから問題はない
と思っていた。

ただ、今まで横にいただけで手を出してきた男たちと、生人が違う
ことだけは分かっていた。

瑞穂にとつては、この頃は今まで殆ど経験したことがない、？ 幸福
？ と呼べる毎日だった。

食事は料理も得意な生人が作ってくれていたが、実家では自分の分
の食事なんて用意されなかった。

実家にいるだけで責められていたのに、生人と暮らす家は見えない
温かさで満ち溢れていた。

初めて存在を肯定された瑞穂は、四季が過ぎる様子をゆっくりと生
人の横で感じる事が出来た。

けれども一方で、幸せであると同時にいつまでこの幸せが続くのだ
ろうかと不安もあった。

いつかは生人にも恋人が出来て、自分が出て行かなくてはいけない
日が訪れるのではないか。

今だって自分が勝手に押しかけているだけで、本当は彼にとって迷
惑なのでは。

そう考えると、不安は止まなかった。

生人の手は温かいゆりかごを揺らすと同時に、瑞穂を奈落の底まで落とすことも出来る手だった。

そして、その予感は的中した。

「彼女が出来た」

もうすぐこの家に来て一年が経つ頃だった。

昼食を食べていた部屋の中にまで春の日差しが入ってきていた。その日差しの温かさからか、とてもじゃないが生人の発言から冷たさを感じることが出来なかった。

「誰なの？」

段々と事態を把握してきた時、瑞穂はかろつじてそう聞いた。

「バイト先が一緒に、同じ吹奏楽だった子。あ、うちの高校だから、お前も知ってるかも知れないな。名前は」

田代美奈子さん。

そう言われた時、時間が止まったような気が瑞穂にはした。

『付き合っていないのに、そんなのおかしいよ』

そう言った美奈子は、瑞穂にとって唯一の友達だった。

それから、家に美奈子が来ると言われたが、反応する気力は瑞穂にはもうなかった。

それでも『出て行ってくれ』とは生人は決して言わなかった。だが、それがまた瑞穂にとって苛立った。

生人はずるい、としか思えなかった。

そしてふと、そんなことを考えている自分は、あの家から救い出してくれた生人に惹かれていないはずがないとやっと気付いた。そして気付いた以上、もうここにはいられなかった。

生人が深夜にバイトに行っている間に、瑞穂は荷物をまとめた。

あのキャリーケースに次々と自分の物を詰めて行ったが、マグカップだけは入れるのを躊躇った。

キャリーケースはもう一杯だ。それに、行く宛もないのに陶器を持ち歩くのは気が引ける。

何より、どうしてもこのマグカップを見ると、生人との日々を思い出してしまう。

結局、食器棚に伸ばした手を引っ込め、マグカップはそのまま置いて瑞穂は生人の家から出た。

そしてまた昔のように男の家を転々とした。そのまま大学二年生になつてしばらくし、晃文堂書店でのバイトを終えて外に出ると生人が待っていた。

丁度、今いる家の男との雲行きが悪くなってきた頃だった。

「生人？ どうしたの？」

学部が違うのもあって会うのは久々で、生人の家に連れ戻されるのではないかと一瞬期待した。

だが、次の瞬間にはその期待は打ちのめされた。

「お前、どうせ行くところないだろ。ここ行けよ」

渡された紙にはここから数駅先の住所と、男の名前が書かれていた。

「何よ、これ？」

「俺のバイトの後輩。一個下だけど、そいつんどこ行けよ」

男の家を紹介されたことに苛立ったが、行く場所に困っていたのは事実だった。

その向かった先で出会ったのが中井俊也だった。

第八章

佐藤先輩は一時間近く、ゆっくりと瑞穂さんの話を聞かせてくれた。瑞穂さんの家のこと、高校時代の瑞穂さん、そして先輩と暮らして出て行った瑞穂さん。

「じゃあやつぱり、これは佐藤先輩のことなんですか？」

俺はあのルーズリーフを渡す。佐藤先輩はそれを受け取ってじっと見ていた。

「多分お前のことだろうが、『二人とも』のもう一人はオレのことだろうな」

しばらくして、先輩は俺にルーズリーフを返した。

「瑞穂がオレを必要としてくれていたのは分かっていた。だから、オレに出来ることがあればしたかったんだ」

それが先輩にとっては、瑞穂さんの勉強を見たり、生活環境を与えたりしたことなのだろう。

俺も最初は生活費を見返りに瑞穂さんと暮らしていた分、恋人ではない異性と暮らすことに関しては否定する気はない。

だが、それ以外で先輩に聞きたいことがあった。

「でも、どうしてみなちゃんと先輩は今、付き合っていないんですか？」

「瑞穂が出て行ってしばらくして、美奈子が家に来た時に『やつぱり付き合えない』って言われたんだ」

なんとなく、その理由が今の俺には分かる気がした。

「あのマグカップ……」

「ああ、片方は瑞穂のだ」

二つのマグカップは今でも食器棚にある。

その二つだけがこの部屋の中で浮いていた。

そして、使われることもないのに並んで置かれていた。

「先輩、どうしてマグカップはあのままに？」

「片付けるのもどうかと思って……一つは瑞穂のだしな」

ああ、やっぱりそうか。

だから、みなこちゃんは。

「先輩、俺、ずっと先輩のこと尊敬してました。けれど、言わせてもらいます」

俺は真っ直ぐと、佐藤先輩の方を見る。

「先輩は、親切心で瑞穂さんにそうやっていたのかもしれませんが、けれど、そんなの優しさでも何でもありません。

ただの偽善です！ 先輩はどれだけ人を傷つけているか、分かっていますか？！」

どんなに先輩が優しくても、みなこちゃんのことを瑞穂さんが知った時、どれほどの絶望を感じたのだろう。

だったら、最初から優しくしない方が瑞穂さんのためだったのではないか。

あんな、詩のような文章を書いた瑞穂さんの想いを考えたら。

だが、俺も他人のことは言えなかった。先輩はただ黙って、俺を見続ける。

「確かに、今まで俺もそうだったかもしれませんが。けれど先輩と違って、俺は反省しました」

尊敬している先輩を前に生意気なことを言ってしまったことに段々後悔してきた。

心臓の鼓動がうるさい。

けれど、ここで終わるわけにはいかなかった。

一番言わなくてはいけないことがある。

「それに、瑞穂さんはぐーたらで俺が家事とかしてましたけど、先輩と違って『俺に出来ることがあれば良かった』なんて言いません。

俺はただ、瑞穂さんといると楽しくて、一緒にいたかっただけですから！」

佐藤先輩は何やら考えている様子だったが、しばらくして力を抜いたかのように息を漏らした。

「そうか。オレも、甘かったな」

そして佐藤先輩はおもむろに携帯電話を取り出し、誰かに電話をかけている様子だった。

「もしもし、瑞穂。オレだけど」

その姿を見て、しまったと思った。
気が動転し過ぎて、瑞穂さんに電話をするという選択肢を忘れていた。

「なあ、あのマグカップどうしたらいい？」

先輩が聞くと、瑞穂さんのあの明るい声が電話口から漏れた。

「好きにしていいいわよ」

「そうか。分かった」

佐藤先輩が携帯を持ちながらそう頷くと、瑞穂さんの声が再び聞こえてきた。

「ねえ、教えて。生人にとって、あたしは何だった？」

そう聞かれた佐藤先輩は明るい顔をして答えた。

「一緒に暮らしてちつとも苦痛じゃなかった。だから理想の結婚相手だったけど、好きとかとは違かった」

「じゃあ今度こそ、好きになれる人を幸せにしなよ」

思ってもいない言葉だったらしい。先輩は苦笑いで返した。

「ああ。そうだな」

そこで俺が電話を代わろうと先輩から携帯を受け取り、「瑞穂さん、あの」と呼び掛けた途端、電話は切られた。

「瑞穂さん……」

俺が落胆していると、横で佐藤先輩はもう一度電話をかけ直しながら「その様子じゃ、お前が電話かけても無駄だったな」と少し笑った。そして電話は繋がった。

「ああ、美奈子か？」

瑞穂さんにかけたかと思っていた俺は「え？」と声を上げた。

だが先輩は動じずに、みなこちゃんを先輩の家に呼び出し、電話を切った。

「お前もいるって伝えといたぞ」

「あつ。ありがとうございます。でも、俺ここにいていいんですかね？」

俺の様子に佐藤先輩は苦笑した。

「お前が何言っただよ。店の連中もとっくに気付いてるぞ」

「いや、先輩。俺の方こそ、ずっと前から気付いていましたよ」

先輩は知っていたのか知らなかったのか、その表情からはよく分からなかったが「そうか」とだけ答えた。

「みなこちゃん、いつも先輩が来る日だけ店にいますからね。さすがに俺でも分かりますって。」

告白された時は夢でもいいやと思っつてついOKしましたけど。

一応好きでしたし、先輩とくつつくまで会えるだけでも良かったんで」

「お前、結構自分を犠牲にするんだな」

夢だと分かっついていて付き合っていたことに関し、先輩は驚いている様子だった。

「少しは期待して付き合ってたのも嘘じゃないですけどね。でも、今日の話聞いて確信しました。それに、先輩だけには自己犠牲が強いと言われたくないです」

俺がそう言つと、先輩は笑った。

「オレはそういうのじゃないよ。ただ、瑞穂がいつ帰って来てもいいようにしたかっただけ。まあ、それで選べなかったのがダメなんだけどな」

「だから先輩に言われたくないんですってば！」

そんなやり取りをしていたら、玄関のチャイムが鳴り響いた。

「でも、一番自己犠牲が強かったのは多分……」

俺がそう呟くと、先輩も頷きながら玄関のドアを開けに行った。

しばらくして、室内にみなこちゃんが入ってきた。

「俊也くん、いきなり出て行くからびっくりしたよ。それに、なんで生人くんちにいるの？」

その質問に俺は短くしか答えなかった。

「瑞穂さんが出て行ったんだ」

「えっ?!」

みなこちゃんはそう声を漏らしたが、俺の口から瑞穂さんの名前が出た事で、どういうことになっているか察したようだった。

「みなこちゃん、みなこちゃんにとって？本当に好き？って思える人は誰かな？」

俺が突然脈絡もなくそう聞くと、みなこちゃんは驚いた様子だった。

「え、そんなの決まってるじゃない……」

みなこちゃんは怯えたような表情をしている。

「本当に？　じゃあ、誰？」

「それは……」

いつもと違って俺が強い口調でそう問い質すことに、みなこちゃんは戸惑っているようだった。

「俺は、分かってるよ」

みなこちゃんは黙り、目で俺と佐藤先輩を見た。

少しの間の後、俺らが何も言わないことでやっとなみなこちゃんは口を開いた。

「……高校生の頃からずっと、生人くんのが好きだった。

でも、瑞穂ちゃんから生人くんと暮らしているって聞いて、諦めようと思った。

けど、告白されてやっぱり好きで……でも、この部屋に来た時、ここから瑞穂ちゃんを追い出しちゃったんだなあと思うと、耐えられなくて」

「じゃあ、俺と付き合ったのは？」

そう聞くと、みなこちゃんは俺の方を向いた。

「それは、うちのお店に瑞穂ちゃんが来て、『どういうこと？』って聞いたら、『今、シユンの家で暮らしてる』って言うから……」

私が生人くんから離れたのに戻れないでいるのなら、私と俊也くんが付き合えば瑞穂ちゃんも上手いくんじゃないか、って」

「どうしてそこまでして……？」

俺がそう聞くと、みなこちゃんは必死に訴えかけるような目をした。

「私って、いつも誰にだって愛想良くしなきゃ、嫌われそうで怖いと思ってたんだ。

そんな私にとって、一人でいても自分らしくいられる瑞穂ちゃんはずっと憧れだった。

だから、瑞穂ちゃんのこと、すごく好きだったからどうしても幸せ

になつて欲しくて！

そりゃあ、俊也くんには悪いことしたつて思つてるけど……」

みなこちゃんは段々と下を向き、最後は涙声だった。

すると、今度は佐藤先輩が口を開いた。

「それは、オレの意思とか全然踏まえられていないよな」

みなこちゃんは顔を上げる。

俺から見ても目に涙を溜めているのが分かったが、それを堪えるかのように強い口調で先輩に向かった。

「だって、前に生人くんが私のこと好きつて言ってくれたけど……
そんなの、信じられるわけじゃないじゃない！」

みなこちゃんはそう言うつと、先輩の部屋の中でも食器棚がある方に視線を移した。

佐藤先輩はそれを見計らつて食器棚の方に向かい、あのペアのマグカップを取り出した。

そして、二つのマグカップを床に叩き付けた。

「えっ……」

割れた音が部屋で響く。

だが放心している俺とみなこちゃんをよそに、佐藤先輩はまっすぐとみなこちゃんを見た。

「オレが好きなのは、お前だ。美奈子」

みなこちゃんはそう聞いて、ただ泣くばかりだった。

そんなみなこちゃんをゆっくりと、まるで割れないように毛布で包む込むかのように先輩は抱き締める。

二人の姿を見届けて、部屋を出て行こうとした。

そんな俺に先輩が気付き、みなこちゃんを抱き締めていた腕の力を解いた。

「中井。ありがとな」

そう言った佐藤先輩は、真正面から俺のことを見てくれていた。

そして先輩の緩めた腕の中でみなこちゃんが俺の方を向くと、何かに気付いた様子で慌ててスカートのポケットに手を入れていた。

「俊也クン、これ……出る時かけてきたから」

俺に向かって、みなこちゃんは手を伸ばしてくる。

受け取ったそれは、新聞受けに入っていたあの封筒の中にあった鍵だった。

急いでいて玄関で落としたままだった。

「俊也クンの優しさにずっと甘えててごめん。でも、瑞穂ちゃんをよろしくね」

みなこちゃんは涙声だったけど、それは嬉し涙のように見える。

それにずっと思い悩んでいたことから解放されたのもあって、少しぎこちないが晴れ晴れとした笑顔を見せてくれていた。

俺は受け取った鍵をポケットに入れ、「うん。ありがとう」と返した後に部屋を出た。

それから、瑞穂さんに何度もかけたが電話に出なかった。

再び探す宛もなく寒空の下を走っていたが、あることに気付いて足を止めた。

こんなに走っても、背中が汗を全然かいていない。

元々、俺は汗っかきではなかったのだ。

ではどうして、引越してから汗がひどかったのか……今では分かる。

「瑞穂さん……」

眠れない夜は先輩の布団に潜り込んでいたという瑞穂さん。

ずっと俺の背中で泣いていたのに、俺は全然そんな瑞穂さんに気付けずにいてしまった。

一刻も早く、瑞穂さんを見付けたい。

その時、一人の名前が思い浮かんだ。

「大越……！」

大越なら瑞穂さんの居場所について、何か知っているかもしれない。

そう思って、俺は大越に連絡した。

第九章

「ねえ、教えて。生人にとって、あたしは何だった？」

ベンチに座って回想していると、生人から電話がかかってきた。その際、瑞穂はずっと聞けなかったことを尋ねた。

「一緒に暮らしてちつとも苦痛じゃなかった。だから理想の結婚相手だったけど、好きとかとは違った」

生人は決して嘘を吐かない。

だから、たとえ今までどんなに思わせぶりの態度を取られていても、それは生人にとって？恋愛？とは違う。それが真実だった。

「じゃあ今度こそ、好きになれる人を幸せにしなよ」

だから、？友達？として言えることなんて、たった一つしかなかった。

そんなこと、分かっていた。

なのに、胸が苦しい。自分にはもう、誰もいないのだ。誰も自分を幸せにはしてくれない。

電話先からシュンの声が聞こえる。

だけでもうシュンに会わす顔どころか声さえも用意出来ず、電話を切った。

今はもう、いつもの能天気な姿にはなれなかった。ベンチの上で膝

を抱え込む。

この季節ならではの冷たい風が、服の隙間を狙って体に当たる。しばらくして、瑞穂は立ち上がった。

ここでは泣けない。

途中、駅のロッカーに寄ってキャリーケースを取り出し、電車の扉に寄りかかって揺れを直に感じていると、コートのポケットの中にあつた携帯のバイブ音に気付かなかった。

中成大学・明王大学駅で降り、明王大近くの九階建てのマンションに着いたのは夕方近くだった。

ここの最上階に大越の住居がある。

「どうしたんですか、また。しかも今日は大荷物で」

部屋に入る際にそうは言われたが、それ以上は聞かれなかった。

店で出会って以来、シュンのバイトがある日は終電の時間まで瑞穂は大越の家にいるようになった。

そのうち、シュンと大越がバイトで組む時は店にしばしば遊びに行った。

夜、一人で眠れなかったから。

部屋の中は薄暗かったが、テーブルランプの灯が室内を橙色に染めていた。

このくらいの明るさが瑞穂にとっても丁度良かった。大越の部屋はいつ来ても落ち着いた。

大越はキッチンでお茶の支度をしているようだったがシュンと違い、大越は必要以上に話し掛けてこない。

それもあってか、シュンの前ではどうしても見せられないもう一人の自分も、大越の前ではいつの間にか自然と出せた。

だから、ここでは気を張らなくていいこと知っていた。
慣れ親しんだソファに深く寄り掛かると、白い布地に包まれた。

瑞穂は再び深く息を吸うと、この半年間を思い返した。

*

*

*

「あーもう、泊まれるならどこでも行つてやるわよ！」

あの日生人から住所を受け取り、自暴自棄な思いで瑞穂はシュンの家に押し掛けた。

そしてシュンの前でその暴君さを最大限に発揮した。

瑞穂が無理矢理布団を奪った後で少しだけ目を開けていると、シュンは少し離れた隣に新しい布団を敷き始めていた。

そして電気が消されると、横で大きく寝返りを打つ音が何度も聞こえた。

その間、瑞穂はずっと身構えていた。いつ男が来てもいいように

瑞穂にとって、いつだってそれは緊張の時間だった。

だが朝方近くなって、隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。

瑞穂は驚くしかなかった。

何人もの男の家を行き来したが、何もしてこなかったのは今までに生人しかいなかった。

寝ているのを確認してシュンの布団の中に潜り込んだ。

瑞穂に背を向けて寝ていたシュンの背中に顔をうずめたが、眠りが深いシュンは起きなかった。

その温もりが裏切らないことが分かると、やっと涙が出た。

瑞穂は昔から、上手く泣けない子供だった。

義理の兄を含め、生人以外の男は瑞穂の体を目的に近寄ってき

た。父に関しては、近寄ってさえ来なかった。事の最中に瑞穂がいくら泣いても、男たちはそんなことを気にする訳なんかない。

そんな自分の存在意義は体を許すことだけで達成されていたが、そのような用途でも必要とされていたかった。

だけどシユンは、翌朝にはつきりと言った。

『俺、絶対そういうことしませんから！』

それは、体以外で求められなくてはこの家にはいられないように思えた。

だが、自分の容姿や性格が他人より劣っていることは瑞穂も分かっていた。

だからシユンと過ごす時間が増えるにつれ、どうしたらずっとこの家にいられるか不安になり、夜になるとその不安は瑞穂に忍び寄った。

いつもは生意気なことしか言えないのに、寝ている間にそっとシユンの背中で泣いた。

バイトがある日はシユンが帰ってくるまでずっと起きて待った。

そして熟睡していると思わせてシユンが眠った後に隣で少し眠り、シユンが起きる前に自分の布団に戻る日々だった。

生人との生活はいつ幸せが壊れるか怖かった。

一方でシユンは段々と、自分との生活を楽しんでくれていたのがなんとなく分かった。

じゃれ合いも多かった。

ささやかな触れ合いのほか、本を読みながら背中に寄りかかってもシユンは嫌な顔ひとつしなかった。

けれど、シユンの隣で酒を大量に飲んで酔っ払っても、シユンは生人と同じで決して瑞穂に手を出さなかった。

それがまた、不安で仕方なかった。

だから自分から行くよりも、抱かれる方がまだ楽だった。

抱いて欲しかった。

一方で生人とはあまり会えていなかったし、美奈子のことは何だか気まずくて自然と遠ざけてしまっていた。

シユンと大越から話を聞くことはあったが、九月の末にシユンのバイト先のコンビニで生人と美奈子の二人と偶然顔を合わせてしまったことがあった。

久々に見た二人が楽しそうに笑っている姿を店の外から見ると、やつぱり辛い。

そして、その翌日。晃文堂書店に客として美奈子が訪れた。だが去り際に聞かされたのは思ってもいない言葉だった。

「私、生人くと付き合っていないからね」

レジを隔てて聞き返す間もなく去っていく美奈子の言葉に、瑞穂は驚かされた。

それでも、一度離れてみると心の整理もつき、生人がどんなに自分に優しくても、美奈子への接し方とは全く違うものだと分かった。ただ美奈子にそう伝えるのも何だか悔しくて、ずっと言えずにいた。

だがしばらく経って、シユンが浮き足立って帰ってきた。

疑問に思ったが、シユンがバイトの間に大越の家に遊びに行った際、事の顛末を聞かされた。

美奈子の真意は分からなかったが、それでも？クリスマスに瑞穂さ

んと過ごす？というように聞こえたシュンの言葉を信じたい自分がいた。

だからシュンには何も言わなかった。

しかし結局、その日は訪れてしまった。

「あのですねー、来週の木曜、午後からでいいんで家空けてくれませんかねー？」

その日もシユンは帰りが遅かった。

少しは覚悟もしていたつもりだったが、返す言葉が見付からない。丁度口の中にカレーが残っていたからって、返事が詰まっているのをシユンは気付いていない様子だった。

「いいよ」

瑞穂が今返せる言葉はそれしかなかった。

まだ寝る時間じゃない。素直になるためには、温もりが欲しかった。結局、いつだってシユンが気付かないようにしか涙を流せなかった。

そして今朝。シユンが浮かれながらも家を出た後と、瑞穂は起き上がった。

元々意識はあったのだが、シユンが出掛けるのを待っていたのだった。

立ち上がって部屋を見回す。

本人は掃除したつもりであったようだが、室内には櫛や鏡にドライヤーがあり、畳んではあってもキャラクター物のタオルが置かれたままになっている。

棚に置かれた瑞穂の酒瓶も隠されていない。一応確認したが、洗面台の歯ブラシも二本のままだ。

お風呂にはシャンプーやリンスも、シユンのとは別に瑞穂のが置か

れている。

「こんなに酒あつたら普通引くし、いくら部屋が片付いていても、こんなんじゃ気付くに決まってるわ！ 大体、『来週の木曜』って言えば誤魔化せると思うなよー！ 世間様はその日、イブだつづの！ 女なめんな」

苛立ちのあまり一人でそう呟くと、一つ一つキャリーケースに私物をしまっていく。

けれどここに来た時よりも増えていて、どう考えてもキャリーケース一つには入りきらなかった。半年という時間を感じる。

ここは、居心地がとても良かった。けれども。

「もう、居られるわけじゃない」

まただ。同じ事が再び起きている。だが考えても仕方なかった。紙袋に入れて持って行こうかと一瞬迷ったが、青い燃えないゴミ袋を広げ、また買い直せるものを次から次に突っ込む。最後に、夏に買ったあの浮き輪たちもゴミ袋に入れた。

「だって、必要ないもの」

そう自分に言い聞かせる。

『また来年』が訪れないことを、シュンと違って瑞穂は既に分かっていた。

というか、気付かれないと考えているシュンがおかしい。

クリスマスイブだって、ずっと楽しみにしていたのに。

シュンの誕生日にケーキの写真が撮れず落胆していたら、『またクリスマスの時に食べるんですから』とシュンは言った。

それから瑞穂は『シユンとクリスマスも過ごせるんだ』と、ずっと楽しみにしていた。

だが、当人はそのことも忘れて今頃彼女とデートだ。

そして家を出る際にゴミを一通りまとめて玄関に置き、キャリアケースを持ってドアを閉めた。

鍵をかけた後、昨日眠れなくてルーズリーフに書いたメモをポケットから出す。

シユンに自分の想いなんて、伝わらなくていいと思っていた。

だけど、何にも伝えないまま去るのはなんだかやっぱり悔しかった。だからあんな詩のような文章を置いていった。

そしてそのメモと一緒に合鍵を封筒に入れ、新聞受けに入れた。

約束だと思っていたクリスマススイブに、帰れる家を瑞穂は失った。

*

*

*

「ム力つく……」

そう言葉に漏らした時、ティーポットとカップを用意した大越が瑞穂の隣に座った。

空は暮れかかっている、遠くに見える山の上で観覧車が光り出している。

ここに来ると、よくあの観覧車の光の模様を見ていた。次々と模様が変わる。

「そういえば、今日はクリスマスイブですね。今から何かケーキ買って来ましょうか？」

気分を晴らすべく大越はお茶を入れながら話しかけたが、瑞穂は窓の向こうを見続けたままだった。

「どうしたんですか、瑞穂さん。もしかして、中井くんの家を出てきたんですか？」

「そうよ。あんなとこ、出てきたわ」

振り返った瑞穂は吹っ切った様子で言ったが、大越は不思議そうだった。

今日が瑞穂にとってどんな日か、大越は知っている。

「どうしてですか、だって今日は」
「知らない」

そうは言ったが、こんな日にわざわざシュンの家を出て行く必要までは本当はなかった。

シュンは『出て行け』なんて一言も言わなかった。……あいつみたいに。

生人との電話で、瑞穂はつい『好きにしてい』と言ってしまった。生人の言葉は正直突き刺さったが、それでも今は段々と、次会えた時には？友達？と言える気がした。

野良猫がどんなに可哀想でも、飼うことが出来ないなら餌を与えてはならなかった。多くの人が分かっていることを、生人は知らなかっただけ。

だが、帰る場所を完全に失って困るのは自分だと一番分かっているはずなのに、どうして生人だけでなくシュンの家まで出て行ってしまったのだろう。

横には大越がいる。自分の中ではその疑問は収まりきらなくて、瑞穂はゆっくりと今思っていることや現状を大越に話した。

「では、どうして瑞穂さんは出て行ってしまったのでしょうか？」

自分の中で起きた疑問をもう一度大越の口から聞かれると、今度はさつきとは違ってゆっくりと言葉を探すことが出来た。

「……怖い。けど、それ以上は分からない」

他には何も言えなかった。

言葉を迷っていると、大越がふと立ち上がった。

そして、瑞穂を後ろからそっと抱き締める。

「ここなら、部屋もあります。」

それに僕なら瑞穂さんのそばにいます。
僕は、瑞穂さんのことがずっと好きです」

大越から急にそう言われ、瑞穂は戸惑いながらも振り返る。
顔が向かい合うと、瑞穂を捕らえていた腕を大越はゆっくりと離した。

「けれど、それでも瑞穂さんは、中井くんを信じたいから怖がっているでしょう。答えはもう出ているじゃないですか」

その言葉の意味を、ゆっくりと考える。そして。

「……裏切られるのが、怖かったのだと思う」

半年暮らして、シュンの家は瑞穂にとっても？家？と呼べる場所になっっていた。

だから、失うのが怖かった。

『出て行け』と言われるくらいなら、自分から出て行った方が傷付かないように思えた。
けれど。

「このままで、いいのかな」

ずっと、逃げたままだった。

特定の男を作らずに、夜が過すごせれば誰でも良かった。
生人の家を出た時さえも。

大越の想いは率直に嬉しかった。

いつもの瑞穂だったら、喜んでこの家に留まるだろう。
大越なら進んで受け入れてくれるのは分かっている。

だけど今は、シュンに 選ばれたい。

たとえ迎えになんて来ないと、分かっている。

「ごめん。あたし、行くね」

キャリアケースを引きずって瑞穂が出て行くのを、大越は見送った。

*

*

*

大越に電話をかけると「とりあえず家に来てください」と住所を言われ、大越の家に初めて行った。

日は暮れていたがその闇の中にそびえ立つ高層マンションの、それも最上階に住んでいるなんて知らず、この時初めて大越が本物のボンボンだったことを知った。

「瑞穂さんがどこにいるか知らないか?!」

ホールにあるインターフォンに大越が出ると、焦りのあまりいきなりそう聞いてしまった。

「中井くん。ずっと待っていました。とりあえず中へ」

大越は質問に答えず、オートロックのドアを開けて中に招いた。エレベーターで昇り、再びインターフォンを押して部屋に入る。室内は全体的に一世帯が暮らしても十分な広さだった。リビングには白い大きなL字型ソファがあり、とりあえず座ると大越も俺の向かいに座った。

「さっきの質問ですが、先程まで瑞穂さんはここにいました」
「どういうことだ?!」

俺の反応に臆する事もなく、大越は続けた。

「瑞穂さんがどこに行ったのか、心当たりがあります。ですが、中

井くん」

大越はそう言う息を吸い込み、今まで見た事のないような怒りを露にした。

「瑞穂さんが今まで、どれほど苦しんでいたと思うんですか?! 今日のことだって、どれだけ楽しみにしていたか……僕じゃ、ダメなんですよ……」

最後の方の大越は泣きたくても泣けない、辛い表情をしていた。

「中井くんがみなこちゃんのことを想っているのは分かっています。でも」

「みなこちゃんとはもう、何もないんだ。それに、分かったから。大越」

落ち着きながら俺が言うと、大越は驚いたようにこちらを見てきた。

「今まで気付けなくて悪かった。詳しくは後で話す。だけど、頼む。瑞穂さんがいるところを教えてくれ」

俺の顔を大越は黙って見ていたが、立ち上がって外を見た。東側の壁一面が窓になっていて大学や街の光が輝く中、山の上に観覧車が見える。

「瑞穂さんは多分、玉那ランドに向かったと思います。ここからよくあの観覧車を見ていましたし、それに」

俺が一度も瑞穂さんの口から聞いたこともない話を大越はする。いや、今日聞いた事はどれも、自分が? 知ろうとしなかった? 話だ

った。

「そっか、だから花火大会で……………分かった。行ってくる」

部屋を出て行こうとすると、「中井くん！」と大越が叫んだ。

「瑞穂さんを、頼みましたよ！ 僕がなんで引き止めなかったか、分かってますよね？！」

その口調から、大越はもしかして瑞穂さんに本気だったのかもしれないと俺は感じた。

「ああ、必ず連れ戻す！」

俺はそう言って、瑞穂さんの元へ向かう。

最終章

昼間から白く鈍よりとした雲が街中を覆っていたが、夜が深まるとついに雪が舞い降りた。

そんな中、クリスマススイブのもあって、玉那ランドは夜間営業をしていた。

地方によくある小さな遊園地だったが、家族連れやカップルでこつた返している。

その人ごみをかき分け、花火大会の場所とは逆方向にある観覧車に向けて急ぐ。

ゆっくりと空を漂う雪で視界を奪われたが、シュンはその足を止めなかった。

そして坂道を駆け上がって頂上に辿り着いた時、観覧車乗り場の前にはキャリーケースを引いた瑞穂がいた。

傘を差さずにいたのもあって、黒のコートには既に白い雪が積もり始めている。

舞い落ちる雪の合間から、ゆっくりと動き続ける観覧車が見えた。

瑞穂は立ち止まって、観覧車の一番てっぺんを見上げていた。

この街を見下ろすように観覧車は高台に立っていて、街の至る所からその姿を見ることが出来た。

この観覧車を見る度に瑞穂は思いを寄せていた。

だがこの場所に一人で立つのは気が引けて、ずっと出来ずにいた。

ここに来ると、どうしても思い出してしまう記憶がある。

それはどんなに願っても、もう二度と手に入らない日々だった。その幸福に手を伸ばせないと考えると、心が締め付けられる思いがする。

もう朧げになってしまった記憶。

けれども、その記憶を消したくはなかった。

だから考えないようにしていた。

幼かった瑞穂が幸せを感じた、たった一つの思い出。

そして今も、幸せだった日々を再び失おうとしている。

どちらも、もう戻れない日々であるとは分かっていた。

けれど、どうしても待ちたかった。この場所で。

振り続ける雪に歓声をあげながら、瑞穂の横を女の子が通り過ぎる。三十代後半そうな男女が並び、母らしき人が前を歩く子供に「滑らないようにね」と後ろから言葉をかけていた。

三人は駅の方に向かって歩いていく。

もう閉園時間だった。

帰る場所なんて、あたしにはもうないんだ。

瑞穂がそう思い、薄く白に染まり始めた地面に視線を移した時だった。

「瑞穂さん!」

雪が降り続く中、シュンは人ごみをかき分けて瑞穂に駆け寄る。

「シュン?! どうして……?」

顔を上げ振り返った瑞穂は、来るはずもないと思っていたシュンが目の前にいることに驚きを隠せない様子だったが、すぐにいつものように明るい顔を作った。

「あー! あんた今日デートじゃん! もしかして場所被ったとか? ごめーん」

茶化す言葉をよそに、シュンは一步步確実に瑞穂に歩み寄る。

「瑞穂さんが小さい時にお父さんと、本当のお母さんと、この観覧車に乗ったことがあるそうですね」

父と母があたしと並んで手を繋ぎ、観覧車に向かう姿。メリーゴランド。花火大会。その手のひらのぬくもり。すべて、まだ家族が壊れていなかった頃の……。

「……なんで……なんで、知ってるの?」

瑞穂の表情は一気に強張る。

瑞穂にとって、それはシュンに言った覚えもないことだった。いや、シュンが知るはずもないことだと思っていた。

一方で、こんな瑞穂をシュンが見たのは、あの美奈子との一件以来だった。

あの時は、目の前で怯えている瑞穂と向き合おうとしなかった。だが、今のシュンは違う。

「お母さんと、家族で過ごした唯一の思い出って……全部、聞きました。俺、瑞穂さんの近くにいたいと思ってて、本当は全然知らなかった。いや、今まで瑞穂さんのこと、知ろうとしなかった」

驚いて言葉にならない表情のまま、瑞穂は黙ってシュンを見ている。以前、大越と三人でここに来ることになった時、気が重たかったのは昔の思い出のことがあった。

ずっと遠ざけていて行けなかった場所。

だけど、閉園と知って最後の花火大会を見たくて、勇気を出してあの時見に行ったのだった。

けれどまさか、シュンに知られているとは瑞穂は思いもしなかった。シュンはまた一步瑞穂に向かって踏み出す。二人は間近で見つめ合う形になった。

「閉園する前に、もう一度ゆっくり来ましょう。とりあえず、今は」

シュンは手を伸ばし、もうどこにも行かないように瑞穂の腕を掴む。そしてもう一方の手をポケットに入れ、それをぎゅっと握って出す。

「うちに、帰りましょう」

シュンがポケットから出したのは、瑞穂が朝出て行く時に封筒に入れたあの合鍵だった。

そして有無を言わずに瑞穂に鍵を握らせると、シュンはその空い

た手でキャリーケースの取っ手を掴んで持ち上げた。

「えっ、なんで？ どうして？」

いつもの構図とは逆に、瑞穂一人が焦っている格好となった。

だがその腕を決して離さず、シュンはキャリーケースを持ちながら瑞穂を連れていく。

腕にかかる力は、いつものシュンとは思えないくらい強かった。

「どうしても、です。瑞穂さんがいない生活なんて、俺には有り得ませんから」

歩きながらシュンが言うと、瑞穂は最初驚いた様子だった。

だが、言葉の意味を少しずつ察すると、口元に笑みを浮かべた。そのまま自然と涙が込み上げてくる。もう隠さなくても良かった。

そして瑞穂は手を引かれたまま、シュンの後ろを歩いていく。

降り続く雪で、後ろには二人分の足跡が出来ていた。

その後、瑞穂はキャリーケースを持たなくなったが、ここから先はまた別の話。

10・2（後書き）

あとがき「読まなくても、作品の展開に支障はありません。」

「伝えたいことがあるなら作品内で書け。後書きに書いても、そんなのは言い訳で見苦しい」

大学の文芸部はそんな感じで、作品を載せていても後書きを書く機会はなかったのですが連載が終わったこともあり、ほんのちょこっとだけ書きたいと思います。

自己満ですので読み飛ばしても支障はありません。

まずは、恐らく殆どの方が初めまして。

せとまあひ瀬戸真朝と申します。ただのしがない女子大学生です。

「小説家になろう」にこの作品を掲載したのは2010年11月、11年1月にかけてですが、私が所属する文芸部の部誌に掲載したのは09年11月、10年2月です。

まさに丁度一年前。ちなみに電撃に投稿するために加筆修正して出したのが10年4月という。

小説家になろうで発表したこの『キャリアケースの女』は通算三度目の書き直し版です。

更に言うと、08年の初夏あたりにはこの作品の原型をネットに載せていた気が。

その時書いたものには、瑞穂が作るあの「黒ずくめの料理たち」が出来上がるまでの詳細や、シュンと大越の大学生活も書かれていました。何より一番異なるのは、瑞穂と生人が同級生であることをシ

ユンが知らされる場面が序盤にあることですが、でも展開は今回掲載しているバージョンと全く一緒になる予定でした。受験勉強に負けて途中で執筆を投げ出してしまいました。

08年の春には既に頭の中に構想はあったことを考えると、瑞穂さんやシュンとはかれこれもう三年近くの付き合いなのですね。

そう思うと、難産ではありましたがとても思い入れのある作品です。

この作品で特に重視したのは

「ライトノベルしか読まない読層でも読みやすい現代小説にしよう」というものでした。

構想を練り始めた当時、私は根っからの現代小説好きだったので「ライトノベルしか読みたくない」と公言する知人が身近にいて、そういった人にもちよつと暗いけど現代小説だって面白いのだと思わせたかったです。

そこで、実は一部と二部の話はそれぞれ別の話として考えていたのですが、一部では？ハイテンションで常識はずれの変な女？として書かれている瑞穂さんの秘密として二部にある設定を付けました。

それによって、最初はただのラブコメとして軽いノリで読んでもらい、ページを進むにつれて「あれっ……？」と思わせるようなストーリー作りを心がけました。

いきなり不幸な生い立ちを説明されても知らない人の話だと耳に入りにくいですが、『瑞穂さん』という人を読者が知ってからだとそういう展開も受け入れて貰えるかなと。

作者としては、後半は苦い薬を吐き出さないように祈りながら少しずつ量を増やして飲ませ続ける思いで書いていました。

まさに実験的な作品でした。

それも登場人物が五人という多さで、瑞穂・生人・美奈子の三角関

係にシュンと大越が混じるといふ、入り組んだ恋愛模様を書くのも初めてでした。

しかし、ラブコメと見せかけて作者はこれを家族モノだと思っています。

メディアワークス文庫の創刊を知り、そのコンセプトはまさにこの作品にふさわしいと思っていましたが、残念ながら外部からの評価は散々でした。

部内でも「ライトノベルをどんなものか分かっていない。君には向いていない」と結構叩かれました。周囲からはとても人気がない作品です。

そう言われる度に、瑞穂さんやシュンに「ちゃんと書けなくてごめんね」と心の中で謝っています。

今も、脳内では瑞穂さんとシュンは動き回っています。

あの二階建て木造アパートの一階で、もちろんこき使われているのはシュンですが。

その姿を見ている自分は二人の関係を『面白い』と思っているのに、それを上手く書くことが出来ていないから評判が悪いのです。

私よりいい書き手の脳内に生まれたら、書かれた二人は作中でももっといきいきとしていたのになと思います。

しかしまだ諦めてなかったりします。

大筋は変える気はありませんが、特に評判が悪い導入部分を全面的に変更し、カップリングも変えつつも『瑞穂とシュンの物語』をまた書きたいと思います。

タイトルもキャリーケースの女ではなく、別作品として発表する予定です。

そこで、出来が悪い作品ではありませんが、感想や指摘など簡単にで

もお寄せ頂けると幸いです。今後に生かしたいと思います。

ちなみに、五人いる中で作者としては生人が一番タイプだったりします（笑）

この作品を読んだ方からは『感情移入できるキャラがない』と嘆かれています、それに関しては第三者的視点で見て頂ければと。

『大越が一番好き』『大越がかわいそう』とはよく言われます（笑）が、大越は最初から脇役と考えていたので仕方ありません
部誌用に書き始めた最初、大越をリストラしようとしてましたからね、私。

読んだ人からそれはまずいと何度つつこまれたことか。
けれども、新作では大越は結構重要キャラになるかもです。

最後に……ここまで読んでくれる方がいるのか分かりませんが、『キャリアケースの女』をお読み頂きありがとうございました。

人気もない作品なので可能性は低いですが、要望があれば（なくても）番外編を書くかもです。

10章の後、遊園地に行った瑞穂とシユンの様子とか。

『キャリアケースの女』というタイトルに疑問を覚える方も多いのですが、そもそもこのタイトルから今の現状の危機感を持つて欲しかったのです。

ネカフェ難民なんて言葉もある世の中ですが、多くの人が当たり前
に持っていて心休まる場所であるはずの『家』さえない人がいるこ
とを少し考えて欲しかったのです。

けれどそんな世の中で、最終的に瑞穂さんは安心出来る『家』をシ
ユンと一緒に手に入れることが出来て良かったと作者は常々思いま
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599o/>

キャリーケースの女

2011年11月10日23時21分発行